

2023 年度 東洋大学 SDGs 実践講座 活動報告



2023 年度「SDGs 実践講座～17 ゴールへの第一歩～」活動報告

- I. はじめに
- II. 運営委員
- III. 運営委員会の開催
- IV. 広告宣伝
- V. 募集
- VI. 受講者数一覧
- VII. 「総合」履修者数
- VIII. 予算執行報告
- IX. 骨子およびプログラム
- X. 講義プログラム
- XI. 講義要旨
- XII. 受講前・受講後アンケート結果
- XIII. 最終レポート(ホームページに掲載)

「SDGs 実践講座」は、2022 年度より 2 年目の開講として、全 15 回の講義を教員および外部講師に担当いただき、対面・オンライン講義として比較的円滑に運営することができた。

以下、今年度の活動報告を行う。

I. はじめに

全学総合講義「SDGs 実践講座 -17 ゴールへの第一歩-」をふり返って

代表担当者：東洋大学副学長/生命科学部 川口 英夫

SDGs (Sustainable Development Goals) は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。この SDGs は発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサルなものであり、皆が日々行っている諸活動の中で SDGs に取り組むことが求められています。さらに、2020 年に「行動の 10 年」がスタートしたという宣言がありました。2015 年に公表された目標に対し 5 年間の予備期間を経て、2020 年から 10 年間をかけて目標を実現しようという、次のフェーズに移ったことが宣言されたということです。

これらの状況を鑑み、本学でも今年度から全学部を対象とした講義「SDGs 実践講座 -17 ゴールへの第一歩-」を立ち上げました。本講義の目的は下記の 3 つです。

- ①SDGs に関し、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶ。
- ②この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に变化させて行く」。
- ③在学中あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長する。

これらの目標に対し、受講生の講義の最終発表や最終レポートから、「行動の 10 年」に相応しい、SDGs をベースとした「行動変容を伴う学び」がある程度実現できたと考えています。

学祖井上円了先生の言葉である、本学の建学の精神は「諸学の基礎は哲学にあり」ですが、これに「他者のために自己を磨く」「活動の中で奮闘する」という言葉を纏めると、「深く考え、実行する」ということとなります。この井上円了哲学の実践版として本講義を実施したわけですが、全受講生が将来、「深く考え、実行する」人材として、国内外で大いに活躍してくれるものと確信しています。

II.運営委員

教学担当常務理事	金子 光一
学長	矢口 悦子
教務部長(副学長)	東海林 克彦(国際観光学部教授)
社会貢献センター長	高山 直樹(福祉社会デザイン学部教授)
講座運営担当責任者	川口 英夫(生命科学部教授)
講座運営担当者	小瀬 博之(総合情報学部教授)
講座運営担当者	清水 宏(法学部教授)
講座運営担当者	堀本 麻由子(文学部准教授)

III.運営委員会の開催

第1回: 2023年 1月12日 (木)

IV.広告宣伝

学内掲示、ホームページ(ボランティア支援室)、本学公式アプリ、ToyoNet-G、ToyoNet-Aceによる配信等で広報活動を行なった。

V.募集

申込期間:	2023年7月10日(月)～9月1日(金)
申込総数:	29名
書類選考:	選考結果発表 9/15(金)
書類選考(延長):	選考結果発表 9/18(月) ※選考担当者:高山 直樹、小瀬 博之、清水 宏、堀本 麻由子
受講決定者数:	24名
受講手続期間:	秋学期履修登録期間までに「履修希望申請書」を提出のうえ各学部教務課で履修登録を行う。
授業開始:	9/22(金) A301 教室(10号館3階)

VI.受講者数一覧

単位:人数

申込者数	29
受講者数	24

● 受講者数(学部・学年別)

単位:人数

学部/学年	1年	2年	3年	4年	合計
文学部	2	1		1	4
経済学部1部	1	1			2
経済学部2部			1		1
法学部第2部			2		2
社会学部第1部	1	1		1	3
社会学部第2部	1				1
国際学部	3		1		4
ライフデザイン学部		1			1
理工学部	2				2
総合情報学部		1			1
生命科学部		1		1	2
食環境科学部				1	1
合計	10	6	4	4	24

VII.「総合」履修者数

1、履修登録者数

- 「総合ⅢB/ 全学総合 J」 16名 (白山キャンパス)
- 「総合ⅨB/ 全学総合 J」 2名 (赤羽台キャンパス)
- 「総合 B/ 全学総合 F」 3名 (川越キャンパス)
- 「総合ⅣB/ 全学総合 J」 3名 (板倉キャンパス)

2、単位修得者数

23名

VIII.予算執行報告

支出

予算目的	予算件名	予算額	執行額	残額
授業・講座等運営	SDGs 実践講座	208,000 円	78,782 円	129,218 円

IX. 骨子およびプログラム

2023 年度 SDGs 実践講座「17 ゴールへの第一歩」の骨子(シラバス)

1. 講座の目的・内容

「SDGs (Sustainable Developmental Goals)」とは、2015 年 9 月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でより良い世界を目指す、17 項からなる国際目標である。本講義の目的は、この SDGs について、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶことである。さらに、この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に変化させて行く」ことで、在学中、あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長することを目指す。

なお、本講義受講期間中に SDGs に繋がる活動をスタートしていただく。社会貢献センター(ボランティア支援室)等で実施する活動、若しくは自身での活動を通じて、本講義の学びを「自分ごと」にする。これらの活動を踏まえ、グループでの最終発表および各自の最終レポートをまとめる。

また、本講座終了後、受講者には東洋大学 SDGs アンバサダーへの登録を推奨します。

2. 本講座の名称

本講座は「SDGs 実践講座」を正式名称とする。

3. 本講座の募集人員、応募方法等

- 1) 募集人員：40 名程度
- 2) 対 象：本学の学部生
- 3) 授業期間：秋学期(9 月 22 日～1 月 20 日まで)
- 4) 応募方法：グーグルフォームより申込をする。記載の志望理由等により選考を行う。

4. 学修到達目標

受講生は、以下の力を涵養し獲得することが期待される

1. SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力
2. 「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力
3. 課題・問題を発見する力
4. 他者と関わりチームとして成果をあげる力

5. 講義スケジュール

I. 1) 学長講義(矢口 悦子 学長)

※矢口学長が当日ご欠席により、SDGs 推進センター長川口教授に変更

2) ダイバーシティ&インクルージョン関連の講演(ラグビー部 OB)

3) アイスブレイク(清水 宏 法学部教授)

II. ワークショップで考える SDGs「世界がもし 100 人の村だったら」から考える SDGs

(外部講師 NPO Dear)

III. 世界と日本の子どもの貧困について考えよう(小野 道子 福祉社会デザイン学部准教授)

IV. カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか? (小瀬 博之 総合情報学部教授)

V. 移民・難民と私たち: 共生社会へのカギ (南野 奈津子 福祉社会デザイン学部教授)

VI. 見える飢餓と見えない飢餓—植物科学からの挑戦—(廣津 直樹 生命科学部教授)

VII. うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」する意味と意義(外部講師 JICA 高田 健二)

VIII. 対話的な深い学びへのアプローチ(堀本 麻由子 文学部准教授)

IX. 開発途上国の生活環境改善に向けて(北脇 秀敏 国際学部教授)

X. 労働とジェンダー(村尾 祐美子 社会学部准教授)

XI. プラスチックごみから海を守る為に消費者の意識を変えるには?(大塚 佳臣 総合情報学部教授)

XII. Security 再考: 公正で公平な社会は実現可能か(市川 顕 国際学部教授)

XIII. 住み続ける社会のデザイン(水村 容子 福祉社会デザイン学部教授)

XIV. 日本人の働き方と働きがいとはこれからどうなるのか(久米 功一 経済学部教授)

XV. 最終グループ発表

上記プログラムを受講したまとめとして、グループ毎に受講生が、口頭および文書により発表する。

予め書面を作成し、当該書面に基づいて口頭報告をさせることで、プレゼンテーション能力の涵養を図る。口頭報告については、教員が講評を行い、さらに思考を深化させるように指導する。

6. 成果の公表について

授業の成果については、運営、プログラム内容、最終報告書などをまとめた活動報告書として公表する。

7. 授業科目としての提供

授業科目「総合」(半期 15 回 2 単位)として提供し、単位認定を行う。

8. 録画収録および ToyoNet-Ace の活用

講義については、録画収録して講義記録として保存する。また、ToyoNet-Ace を活用して、授業運営に関する管理を行う。

9. 講師謝礼

学内者:授業コマに含む 学外者:33,000 円(税込)

X. 講義プログラム

2023年度 東洋大学SDGs講座

2023/6/1

秋学期 講義+ディスカッション	秋期(金5)	17のゴール (※4は共通)	授業 形式	内容詳細(例)	講師	所属・肩書き	
第1回	9月22日	全体	ハイフレックス	(16:30~16:40)学長挨拶、SDGs推進センター長挨拶	矢口 悦子、川口 英夫	学長、副学長/SDGs推進センター長	
				(16:40~17:40)「ガイコクジじゃないもん！」上映他 (Diversity)	本学ラグビー部監督、元キャプテン他		
				(17:40~18:00)アイスブレイク	清水 宏	法学部	
第2回	9月29日	全体	Web/対面	「世界がもし100人の村だったら」から考えるSDGs(仮)	外部講師 NPO Dear	特定非営利活動法人 開発教育協会講師	
第3回	10月6日	1・5・11	ハイフレックス	世界と日本の子どもの貧困について考えよう	小野 道子	福祉社会デザイン学部	
第4回	10月13日	7・12・13・15	ハイフレックス	カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか？	小瀬 博之	総合情報学部	
第5回	10月20日	3・10・16	ハイフレックス	移民・難民と私たち：共生社会へのカギ	南野 奈津子	福祉社会デザイン学部	
第6回	10月27日	2	ハイフレックス	見える飢餓と見えない飢餓—植物科学からの挑戦—	廣津 直樹	生命科学部	
第7回	11月10日	17	ハイフレックス	うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」する意味と意義	外部講師(JICA高田健二)	外部講師	
第8回	11月17日	4	ハイフレックス	対話的な深い学びへのアプローチ	堀本 麻由子	文学部	
第9回	11月24日	3・6・11	ハイフレックス	開発途上国の生活環境改善に向けて	北脇 秀敏	国際学部	
第10回	12月1日	5	ハイフレックス	労働とジェンダー	村尾 祐美子	社会学部	
第11回	12月8日	3・6・12・14	ハイフレックス	プラスチックごみから海を守る為に消費者の意識を変えるには？	大塚 佳臣	総合情報学部	
第12回	12月15日	16	ハイフレックス	Security再考：公正で公平な社会は実現可能か	市川 顕	国際学部	
第13回	12月22日	11	ハイフレックス	住み続ける社会のデザイン	水村 容子	福祉社会デザイン学部	
第14回	1月5日	8	ハイフレックス	日本人の働き方と働きがいはいはこれからどうなるのか	久米 功一	経済学部	
第15回	1月19日	全体	ハイフレックス	最終グループ発表	運営担当		

*プログラム内容・授業形式については変更する場合があります。

1: 貧困をなくそう 2: 飢餓をゼロに 3: すべての人に健康と福祉を 4: 質の高い教育をみんなに 5: ジェンダー平等を実現しよう 6: 安全なトイレを世界中に 7: エネルギーをみんなにそしてクリーンに 8: 働きがいも経済成長も 9: 産業と技術革新の基礎を作ろう 10: 人の国の不平等をなくそう 11: 住み続けられるまちづくりを 12: つくる責任、つかう責任 13: 気候変動に具体的な対策を 14: 海の豊かさを守ろう 15: 陸の豊かさを守ろう 16: 平和と公正をすべての人に 17: パートナーシップで目標を達成しよう

SDGs17 目標よりテーマを設定し、講義を行った。毎回の講義では、グループを設定し、グループワークやディスカッションを重視し、意見を出し合いながらグループ毎の意見をまとめ、発表した。

XI. 講義要旨

SDGs 実践講座第1回 講義要旨

9月22日(金)

講師名: 川口 英夫(生命科学部教授)

テーマ: SDGs 推進センター長挨拶

本学の歴史を振り返り、創立者井上円了先生の思想に基づく建学の精神の中に、すでに現在のSDGsに通じる考え方が示されていることを述べた。具体的には、① 創立直後に始まる講義録の送付による通信教育、②当時の専門学校として初となる女子学生の受け入れ等の事例で説明した。次に現在に目を向け、2021年6月に制定された「学校法人東洋大学SDGs行動憲章」を読み直し、これに基づく具体的な取り組み事例として、③学生SDGsアンバサダーを中心とした多様で主体的な活動、④教員による重点研究としての探求、⑤大学としての平和にかかわる取り組みとなるウクライナからの学生の受け入れ等を取り上げた。さらに、ダイバーシティ&インクルージョン関連の講演を、本学ラグビー部OBのお母さんが作成した絵本に基づく動画で視聴した。以上の題材を基に、受講者と共にSDGsに関する問題意識を持つこと、行動することの重要性を確認することができた。

SDGs 実践講座第2回 講義要旨

9月29日(金)

講師名: NPO 法人 Dear 八木 亜希子

テーマ: 「世界がもし100人の村だったら」から考えるSDGs

インターネット上で、拡散することによって世に知られることとなった、「世界がもし100人の村だったら」は、世界をひとつの村にたとえ、人種、経済状態、政治体制、宗教などの差異に関する比率はそのままに、人口だけを100人に縮小して説明している。受講者には、気になった文章をグループ内で共有し、なぜその部分が気になったのか、どういう感情を抱いたのかを考え、グループごとに発表を行った。2030年までに達成すべき開発目標として掲げられている「SDGs」。受講者はこの年に世界がどうなって欲しいか、あるいはどうなっていると思うかを話し合い、それまでに自分たちができることは何かについて考え、地球社会に住む自分たちのあり方、未来について考えるきっかけとなった。

SDGs 実践講座第3回 講義要旨

10月6日(金)

講師名: 小野 道子(文学部准教授)

テーマ: 世界と日本の子どもの貧困について考えよう

この講義では、SDGs 目標1の「貧困をなくそう」の内容やターゲット、絶対的貧困と相対的貧困の違いについて説明できるようになること、世界と日本の子どもの貧困の現状や対策について自分なりの考えを持つことができるようになることを目的とした。まずは「子どもの貧困」のイメージについて各自で考えてもらった。

講義を聴くだけでなく、世界で極度の貧困状況にある子どもの数は減っているのか、日本のひとり親家庭の子どもの貧困率がなぜ高いのか、日本の子どもの貧困対策など、グループで話し合い発表した。子どもだけでなくおとなの貧困も自己責任ではないこと、災害などが起きれば誰でも脆弱層になり得るため、平時からのレジリエンス構築が大切であること、2030年までにどのようにしたら子どもの貧困を減らせるのか考え続けてもらうことの重要性などを伝えた。

SDGs 実践講座第4回 講義要旨

10月13日(金)

講師名:小瀬 博之(総合情報学部教授)

テーマ:カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか?

SDGs(持続可能な開発目標)のうち、主にSDG7(エネルギーアクセス),12(生産と消費),13(気候変動対策),15(陸域生態系保全)に関わる「カーボンニュートラル=脱炭素社会」をテーマに講義を行った。最初にresponを活用して受講者の関心を把握、共有しながら、SDGsを内包する「2030アジェンダ」の基本理念の説明、トレードオフになっている社会・環境・経済の問題を講義した。続いて、学生のグループワークを行うにあたって、環境省が提唱する「ゼロカーボンアクション30」や大学で私が行ってきた里山林保全活動とごみ減量・分別の実践事例を紹介した。グループワークは、「カーボンニュートラル=脱炭素社会に向けて学生や大学で実施できることのアイディアを出し合ってまとめる」という課題を課し、6つの各班が「プラントベースの食材の使用」「飲料提供とマイボトル・タンブラー持参」「食堂の食べ残しを減らす」「教科書のリサイクル」「紙ごみの分別」などのアイディアを発表して情報共有した。これらのアイディアは、後半のグループワークに生かされたものと考えられる。

SDGs 実践講座第5回 講義要旨

10月20日(金)

講師名:南野 奈津子(福祉社会デザイン学部教授)

テーマ:移民・難民と私たち:共生社会へのカギ

本講義では、SDGsの目標3、10、16をテーマとして、1)世界の難民の実情、2)移民・難民の経験を考えるワーク、3)難民受け入れに賛成・反対の立場でのディスカッションを行い、難民の理解と共生について学んだ。まず、世界における難民・移民の数や地域、人が移動をする/強いられる要因や背景をデータから確認した。次に、「自分の大切なもののほとんどを急に手放す」という経験を感じるための個人ワークを行い、その時に生じた感情を共有した。そして、共生のために私たちが現実的経験することとして、難民受け入れに賛成、反対の立場を割り当て、それぞれの立場の思いや主張を小グループで共有するワークを行った。最後に、「共生社会のカギとは何か」について話し合った。「自分の感情として経験出来て見方が変わった」「難民について知ること」「自分事としてとらえること」等が、今後大切なこととして、報告された。

SDGs 実践講座第 6 回 講義要旨

10 月 27 日(金)

講師名: 廣津 直樹(生命科学部教授)

テーマ: 見える飢餓と見えない飢餓—植物科学からの挑戦—

本講義では、SDGs の目標 2「飢餓をゼロに」をテーマに講義を行った。まず、世界の飢餓状況について説明した。このような食料問題の原因と解決策についてグループワークを実施し、学生からは、社会的手段としては気候変動対策やフードロス対策、国際協力など、技術的手段としてはストレス耐性作物や栽培技術の改善など数多くの意見が出された。次に、ビタミン A や鉄、亜鉛などの栄養素の不足という目に見えない飢餓“hidden hunger”の状況と今後の予測について紹介し、「hidden hunger”の対策と予想される問題点」についてグループワークを実施した。学生からは、栄養素を強化した作物の育種や、目に見えない栄養素についての食育の必要性などの意見が出された。様々な学部の学生が集まる本講義では、グループワークにより様々な視点の意見が出された点が特徴的であった。最後に、文理融合必要性と教育を受けている者の責任について総括し、講義を締めくくった。

SDGs 実践講座第 7 回 講義要旨

11月 10 日(金)

講師名: 高田健二 島根県立大学客員教授/海士町グローバル・フロンティア大使

テーマ: うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」(SDGs 目標 17)

SDGs 目標 17 は、国家間の制度改善や資金調達といったターゲットを軸としており、大学生がそうした大規模な課題に取り組むためには、知識をつけるコンテンツ学習だけでは不十分であり、受講生たちの資質を鍛えるコンピテンシーを学ぶことが必要である。そのために必要となる考え方(6 次の隔たり、スチュエーション・リーダー、想像力、3 つのカン等)について講義前半で取り上げた。講義後半では、東洋大学卒業生が代表取締役社長をしている「やおきん」の代表商品である「うまい棒」から、「パートナーシップで目標を達成」することを「やおきん」の具体的な取り組みから説明し、講義前半のコンピテンシーで説明した項目が活かされている事例として伝えた。東洋大学生たちが大学卒業後の社会で活躍するためには、今回の講義で説明したコンピテンシーを磨き続けることが重要である。今後、うまい棒を食べる機会に、この授業内容を意識して自己研鑽してほしい。

SDGs 実践講座第 8 回 講義要旨

11 月 17 日(金)

講師名: 堀本 麻由子(文学部准教授)

テーマ: 「対話的な深い学びへのアプローチ」

本講義は、SDGs 17 ゴールに関し、「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力を育むこと、さらにこれまでの授業内容を振り返りつつ、対話的なディスカッションを通して、問題・課題(SDGs17 ゴール)への取り組み方を考えることをねらいとした。はじめに、「対話的なディスカッション」に関する講義を行い、その後グループ演習を実施した。各グループは 17

ゴールの内の関心の近い学生同士による4～5名程度の編成とした。各自の問題関心を深めるため、質問中心の話し合いによる自己紹介ワークなどを活用し、グループメンバーの互いを理解することで、共通関心を探る機会とした。今回は、SDGsアンバサダーの学生に、グループ演習のアドバイザーとして、グループ活動への助言をお願いした。そのことが、グループ活動の成果発表や講座終了後のアクションプランへのつながりを受講生がイメージするうえで非常に役立った。

SDGs 実践講座第9回 講義要旨

11月24日(金)

講師名:北脇 秀敏(国際学部教授)

テーマ:開発途上国の生活環境改善に向けて

講義では、まずMDGsからSDGsへ世界的な開発目標が移り変わった過程を紹介した。先進国から途上国への国際協力が中心課題であったMDGsと比較し、「誰一人取り残されない」SDGsに変わり多くの人に受け入れられたことを述べた。次に途上国の生活環境を守る重要な要素として水供給、し尿・排水処理、廃棄物処理の3つの公共事業が途上国住民の健康に関係する要素であり、健康的な生活を送るためには、これらが破綻のない形で実施されていることが必要なことを述べた。講義において特に強調した点は、これらの不備があるとどのような健康上の問題点があるかという点に加え、途上国において生活環境を改善する上でどのような適正技術を導入すれば良いかという点にも考察を加えた。また東洋大学の卒業生が途上国の環境改善に青年海外協力隊員として活躍している様子も紹介し、聴講生がどのようにこうした活動に関われるかの議論も行った。

SDGs 実践講座第10回 講義要旨

12月1日(金)

講師名:村尾 祐美子(社会学部准教授)

テーマ:労働とジェンダー

講義では、SDGs 目標5「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」の内容や達成度の測定方法、この目標の達成度がとりわけ低い日本の現状について確認したのち、雇用労働分野で男女共同参画のためのPDCAサイクルを動かすよう企業に義務付ける国内法「女性活躍推進法」と、女性活躍推進企業データベースで公表されている情報の使い方を学んだ。その後、女性活躍推進に関連して学校法人東洋大学が公表している事業主行動計画や公表情報を他の私立大学のものと比較しつつ、各大学の女性活躍推進の特徴や課題、事業主行動計画の内容やその目標設定の適切さについて話し合うグループワークを行い、最後にまとめとして、グループでの話し合い結果を報告しあって全体で共有した。授業後、学生は東洋大学の女性活躍推進の取組に対する自らの評価とその理由をまとめたミニレポートを提出した。

SDGs 実践講座第11回 講義要旨

12月8日(金)

講師名:大塚 佳臣

テーマ: プラスチックごみから海を守る為に消費者の意識を変えるには?

SDGs 目標 14(海の豊かさを守ろう)の主題の1 つとして挙げられている海洋プラスチック問題ならびにマイクロプラスチック問題を取り上げた。プラスチックの特徴、使用状況、海洋プラスチックを巡る世界の動向を紹介した上で、海洋プラスチックがもたらす環境影響、マイクロプラスチックの発生メカニズム、マイクロプラスチックがもたらすであろう環境影響について解説をした。その上で、「海洋プラスチック問題・マイクロプラスチック問題に向けて、個人・社会・産業がなすべきこと」「それを社会・消費者がそれを受け入れるようにするために必要な情報提供のあり方」をテーマとしたグループディスカッションを行い、その内容を発表していただいた。最後に、海洋プラスチック問題のように、影響の実態(範囲、影響の大きさ)が不明である問題を扱い世の中に働きかける上で、留意すべき点(因果関係、発生確率とリスクの程度、実効性の考慮)を紹介した。

SDGs 実践講座第 12 回 講義要旨

12 月 15 日(金)

講師名:市川 颯(国際学部教授)

テーマ:Security 再考:公正で公平な社会は実現可能か

この授業では、欧州における「エネルギー安全保障」という言葉に投げ込まれた多様な意味を理解することで、Security 概念が多様であることを学生に理解できるよう試みた。そのため、EU エネルギー政策の歴史および特徴について説明し、EU 加盟国のエネルギーの現状を俯瞰した。その上で、EU による対露経済制裁、EU のウクライナ戦争発生後のエネルギー戦略である REPowerEU、を踏まえて、EU(および EU 加盟国)におけるエネルギー安全保障概念の整理を試みた。

SDGs 実践講座第13回 講義要旨

12 月 22 日(金)

講師名:水村 容子(福祉社会デザイン学部教授)

テーマ:住み続ける社会のデザイン

本講義では、スウェーデン社会において少数ながら供給が継続されているコレクティブハウスについて紹介する。ヨーロッパ諸国では、18 世紀以降低所得世帯の家事労働の合理化を目的とした共同性の高い集合住宅が供給されてきた。その伝統を受け継ぎ、女性の社会進出が進んでいるスウェーデンにおいても共同性の高いコレクティブハウスが存在している。スウェーデン型のコレクティブハウスの特徴はコモンミールと呼ばれる集合住宅の住民が皆で夕食を供し合う活動であり、今回の講義ではその実態や住民のこの活動に対する評価を紹介する。

コロナ禍以降、孤独の隔絶、さらには食材やエネルギーなどをシェアすることによる持続可能なライフスタイルが注目され、ヨーロッパ諸国でこうした共同性の高い集合住宅の供給が広まっている。本講義では持続可能な居住形態としてのコレクティブハウスの可能性を検討すると同時に、日本社会における持続可能な居住のあり方について考察を行った。

SDGs 実践講座第 14 回 講義要旨

1 月 5 日(金)

講師名:久米 功一(経済学部教授)

テーマ:日本人の働き方と働きがいはいこれからどうなるのか

本講義では、「未来の仕事 働きがいと新しいテクノロジーから考える」という視点から議論がなされた。はじめに、SDGs 目標8「働きがいも経済成長も」を確認した上で、働きがいの尺度として、活力、熱意、没頭の3要素からなるワーク・エンゲイジメントが紹介された。コロナ禍では、休業要請等により、ワーク・エンゲイジメントが下がった職種があり、それをどう是正すればよいかが議論された。また、働きがいをも高める方策として、テクノロジーの応用が示された。具体的には、内閣府ムーンショット目標 1 が掲げる、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会が実現したならば、自分自身はそのテクノロジーを何に活用するかが議論された。デジタル化に伴う付加価値の変化と、深刻な人手不足による社会の機能低下の心配に対して、新しいテクノロジーを活用して、時間や場所などの制約にとらわれずに、働きがいを感じながら働くことの可能性が示された。

XII. 終わりに

運営担当教員

小瀬 博之 (総合情報学部教授)
清水 宏 (法学部教授)
堀本 麻由子 (文学部准教授)
高山 直樹 (社会学部教授)

小瀬 博之(総合情報学部教授)

SDGs(持続可能な開発目標)をテーマにすることは、社会・経済・環境にまつわる幅広い課題を俯瞰的に、そして統合的に捉えるため、また、一人ひとりがこの問題に向き合ってパートナーシップを形成しながら解決に向けて行動していくために有用なものであることが、学生のアンケートや最終発表、最終レポートから把握できる。この「SDGs 講座」だけでなく、この講義を各学部学科の専門科目に生かせる形で伝えていき、全教職員、全学生の SDGs に対する意識や行動をレベルアップしていく必要性を感じる。

この授業の課題としては、まず受講希望者の少ない状況である。貧困、飢餓、開発途上国、労働、ジェンダーなど、人にまつわるグローバルなテーマが多く扱われている一方で、資源やエネルギー、また生態系に関わるテーマは扱われる回が少ない。最終的な行動としては環境にまつわるテーマを採り入れている学生が多いことから、環境にまつわる内容を充実することで、学生の関心をもっと高めることが可能であるかもしれない。また、自分ごととしてSDGsを捉えるためには、もう少しローカルな話題も採り入れることも必要かもしれない。さらに、朝霞や川越のような理系主体のキャンパスの場合、この授業で取り上げられていない「目標 9:強靱(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る」についても取り扱うことで、学部学科の専門分野とSDGsとの結びつきを考え、今後の学習や研究に生かすきっかけを与えることができるのではないかと感じた。

清水 宏 (法学部教授)

文系学部の教員をしていると、知識は教えることができる、演習やフィールド・ワークで手本を見せることはできる、しかし、学生が主体的に実践するところまで指導できるだろうか、という点で期待半分、不安半分という感がある。よく、馬を水場まで連れていくことはたやすいが、水を飲ませるのは至難の業であると言われるが、まさにその通りであると思われる。

この講座もそういうものであり、学生の意欲を掻き立てるためのカリキュラムをいろいろ考えることはできるものの、果たして、そこから、講座に謳われているように、実践に結びつくだろうか、羊頭狗肉とならないだろうか、というのはあれこれ思い悩むところである。

しかしながら、案ずるより産むが易しということなのだろうか、受講生たちは実に気負いも街いもなく、課題を発見し、計画を立て、解決のための行動にとりかかっている。本当に頭の下がる思いであるとともに、そうした活動のほんのわずかでも関わることができたことに心からの感謝を申し上げたい。加えて、そうした実践に手厚くかつ温かいサポートをしていただいたエクステンション課の皆さんにも感謝を申し上げたい。

堀本 麻由子(文学部准教授)

本講座も2年目となり、全キャンパスの学生同士が同時にオンライン・対面で受講し、グループ演習も行う授業運営は定着したと考えられる。その一方で、学生が講座目標の「自分ごと」として理解したことについて、「主体的な行動として行動変容につなげる」という点においては課題があることも明らかになった。たとえば、SDGsの17項目を知識として理解し、学生たち自身で、様々なアクションプランを考え、最終的に実践につなげる本講座のプログラムのあり方をさらに発展させる必要がある。

本講座のねらいは、学内外の様々な専門分野からの講師陣の充実した講義だけでなく、講座の流れとして、学生が同じ問題意識をもつ「仲間」と議論し、共に行動を考える仕組みがあり、講座終了後の学生主導による実践が期待される。そのために、社会貢献センターにおけるSDGsアンバサダーによる活動とのつながりの仕組みを、さらに検討することが求められるだろう。

高山 直樹(福祉社会デザイン学部教授)

「SDGs 実践講座 —17 ゴールへの第一歩—」の授業は、SDGsを「我がこと」としてとらえていくことを目的として、発信につなげていく方向性をつくることであった。その目的は概ね達成できたことは、学生のプレゼンテーションやレポートから認識できた。

持続可能な開発目標(SDGs)とは、すべての人々にとってよりよい、持続可能な未来を築くための青写真であり、価値である。貧困や不平等、気候変動、環境問題、平和と公正など、どれをとっても「その通り」の事象である。しかし「我がこと」としてとらえてみようとするところには、大きな乖離があったり、また無意識の偏見(Unconscious bias)があるのでないか。その内在する矛盾に関して葛藤し、対話していく必要がある。そのためには、対話する仲間が必要不可欠である。その対話づくりの起点となり、「我がこと」をより深化させ、仲間を助け、17 ゴールへの第一歩から第二歩を、踏み出すことに至った授業となったと考える。

以上

アンケート結果総評 法学部 清水宏教授

本講座の受講を通じて、関心のあるSDGsのテーマに変化がみられます。このことは、講座での学びを通じて問題の本質を適切に理解し、自分の問題意識と照らし合わせ、自分の進むべき道を捉えなおしたことによるものと思われ、成長の一端を垣間見ることができたと思います。また、SDGsは単なる理想ではなく、実現すべき目標であるところ、目標の実現に向けた計画を立て、また、実行に移している旨の回答が受講後に増加していることを鑑みると、皆さんの心の中にあつた熱い思いを形にする後押しができたのではないかと嬉しい思いが致します。

この講座は受講がゴールではなく、むしろ、今後のさらなる活動へのスタート地点となるものです。今後は社会において、SDGsの課題に自主的・主体的に取り組み、どこまでも前進していくことを大いに期待しています。また、SDGsは一人で取り組むには大き過ぎると思われるほどの課題ではありませんが、仲間がいれば力を合わせることもできますし、さらに、次の世代へと引き継ぐこともできます。講座での仲間を始めとして、さらにつながりを広げていくことができるよう頑張ってください。

皆さんの活動が、他の東洋大生に一步を踏み出す勇気を与えるものと確信し、かつ、実際にそうなることを願っております。

1.1 SDGsの項目をいくつ知っていますか。

受講前

知っている目標の個数	回答
1	1
3	1
4	1
5	3
7	1
8	3
9	1
10	3
13	2
15	1
17	6
23	

受講後

知っている目標の個数	回答
4	1
10	1
11	1
17	17
20	

1.2 SDGsの目標のうち、現在あなたが最も関心を持っているものを一つ上げてください。

受講前

最も関心を持つ目標	回答
1: 貧困をなくそう	4
3: すべての人に健康と福祉を	3
4: 質の高い教育をみんなに	2
5: ジェンダー平等を実現しよう	2
8: 働きがいも経済成長も	2
10: 人や国の不平等をなくそう	1
11: 住み続けられるまちづくりを	2
12: つくる責任つかう責任	3
13: 気候変動に具体的な対策を	3
14: 海の豊かさを守ろう	1
23	

受講後

最も関心を持つ目標	回答
3: すべての人に健康と福祉を	2
4: 質の高い教育をみんなに	2
5: ジェンダー平等を実現しよう	3
8: 働きがいも経済成長も	1
10: 人や国の不平等をなくそう	2
11: 住み続けられるまちづくりを	4
12: つくる責任つかう責任	2
13: 気候変動に具体的な対策を	2
14: 海の豊かさを守ろう	1
15: 陸の豊かさを守ろう	1
20	

1.3 あなたは、設問2で挙げた目標の実現に向けて、何かを実践しようと計画していますか。

受講前

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	3
3	7
4	5
5	3
6	4
7	1
23	

受講後

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	2
3	2
4	3
5	3
6	3
7	7
20	

1.4 あなたは、設問2で挙げた目標の実現に向けて、既に計画の実践の段階に入っていますか。

受講前

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	7
2	3
3	1
4	5
5	4
6	1
7	2
23	

受講後

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	4
2	0
3	3
4	3
5	4
6	2
7	4
20	

★2023年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前23名 受講後20名

1.5 設問3と4のいずれかでSDGsの目標実現に向けた実践を計画している、または、既に実践段階に入っていると回答した人（5～7のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのようなことを実践しようと、あるいは、既に実践していますか。自由に記述してください。

受講前

<p>子供支援の団体でボランティア活動をしています。キャップを集めてポリオワクチンを寄付する活動をしています。大学でもっとフェアトレード等のものが使われるような取り組みや寄付金付きの自動販売機を設置する取り組みをしたいと考えています。</p>
<p>食品を選ぶときに、必要なだけ買ったり賞味・消費期限の早いものから使うようにしている。</p>
<p>自分たちが主催となって防災施設に見学しに行き、メンバー間の学びを深めた。</p>
<p>身の回りからをテーマにエアコンの使用を抑えたり、家電においても省エネの物を買う。普段からはエコバッグや水筒の利用。また、知識を得る上でSDGsアンバサダーや文京区のイベントを通して理解と発信について深めている。</p>
<p>日本赤十字社のボランティアとして、若年層の献血の推進に取り組んでいる。日本赤十字社では、近年深刻な若年層の献血離れの解決に、同世代の呼びかけが必要であると考え、学生が献血を推進するボランティア活動を実施している。自分も大学1年次からこのボランティアに参加し活動をしている。献血は、全ての人が行う可能性のある輸血を継続的に支えるという点で、SDGsの3に該当すると考える。</p>
<p>まず、SDGsの目標について知らなければ実践も発信も出来ないと思ったのでSDGsに関する授業(本講義)を履修し、SDGsの取り組みをより深く理解する。</p>
<p>実際にSDGsアンバサダーの取り組みで「おにぎりアクション」という活動を行うことになり、その赤羽台キャンパスのリーダーになった。</p>
<p>子ども食堂に参加し、厳しい生活をする方々と交流する中で、具体的にどんなことに困っているのか等をリサーチし、どうすれば改善に向けることが出来るか一緒に調べたり、考えたりしている。</p>
<p>ペットボトルを買わないように、マイボトルを持ち歩いている。</p>
<p>なぜ、ジェンダー平等を実現しようというもくひょうを立てられているくらいにジェンダー平等の実現が難しいのかを調べたりしている</p>

受講後

<p>リサイクルで服を買う</p>
<p>第15回目の授業内で発表したドギーバッグの活動。</p>
<p>歓楽街の中の人の仕事事情を聴きとり、彼ら今やっていることを働きがいの仕事なのかを聞かせる、居酒屋のスタッフさんたちも調査の対象となる。事情を知った後、案を作る、もしいいだったら、そのままにする。もし不平等扱われるのなら法案を作る。</p>
<p>現在、能登半島の人々がまちに住み続けることが難しい状況になっているので、彼らがいち早く日常生活に戻れるようにボランティアをしたいと思う。SDGsアンバサダーとして、2・3月に行われる災害ボランティアに参加するつもりだ。また、学校で行った募金の時にあまり手持ちがなくて募金できなかったの、自分のできる範囲で信用できる口座に入金して募金したいと思う。</p>
<p>ウォーターサーバープロジェクトや、文京区の環境講義に参加したりしている。</p>
<p>ウォーターサーバープロジェクトに参加している。</p>
<p>目標3・4グループで、東洋アプリにおける防災知識の向上や情報発信の充実のために取り組んでいる。自分は今年度で卒業のため、今後実行していくには同じグループの後輩たちであるが、自分も計画と一緒に取り組んだ仲間として、意見を出したり進め方を助言するなど、今後も協力していきたいと考えている。</p>
<p>私の育った町は多国籍で有名な町で特にブラジルの方が多く暮らしています。そんな町役場が現在行なっている政策を調べ、まとめ終わったらインタビューし、自分にできること、同じような考えを持った人が多くいることでできる新しい何かを模索していきたいと考えています。</p>
<p>大学でドギーバッグの導入について行動に移そうとしています。既に開始している、マイボトルに関する取り組みの続きを行おうとしています。</p>
<p>既に実践していること：被災地への募金活動 既に実践していること：防災クイズラリー</p>
<p>カーボンニュートラルへの取り組みとしてSAFについて理解を深め、多くの人に知ってもらうためにできることを考えて計画しています。</p>
<p>学内へのプラントベースフードの普及。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・学内での防災情報の普及活動 ・子ども食堂での親御さんの悩み事の聞き取り調査 ・地域のお祭りの企画、運営、開催 等

★2023年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前23名 受講後20名

1.6 あなたには、SDGsの目標のうち、設問2で挙げたもの以外にも、大きな関心を抱いているものがいくつありますか。個数を選択してください。(選択必須)

受講前

設問2で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
1	1
2	4
3	3
4	4
5	2
7	3
8	1
9	1
13	1
16	2
17	1
	23

受講後

設問2で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
1	1
2	1
3	3
4	2
5	4
7	2
8	1
9	1
11	1
13	1
15	1
16	1
17	1
	20

1.7 設問6でひとつでも「ある」と回答した方に尋ねます。設問2で挙げたものと設問6で挙げたものを、あなたなりに関連付けて考えていますか。(考えていない) 1←3→5→7 (考えている)

受講前

(考えていない)1←3→5→7(考えている)	回答
1	2
3	4
4	4
5	4
6	3
7	5
無回答	1
	23

受講後

(考えていない)1←3→5→7(考えている)	回答
1	1
3	2
4	2
5	4
6	3
7	7
無回答	1
	20

1.8 あなたは、SDGsの目標のうち設問2で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していますか。(発信していない) 1←3→5→7 (発信している) (選択必須)

受講前

(発信していない)1←3→5→7(発信している)	回答
1	12
2	2
3	2
4	4
5	3
	23

受講後

(発信していない)1←3→5→7(発信している)	回答
1	3
2	3
3	3
4	7
5	2
7	2
	20

1.9 設問7で、SDGsの目標のうち設問2で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していると回答した人(5～7のいずれかを選択した人)は、具体的に、どのようなことを発信しようと、あるいは、既に発信していますか。自由に記述してください。

受講前

カーボンニュートラルの実現に向けた情報収集
イベント内での発信や、Twitterでのそのようなイベントの呼びかけや考えの発信。
「おにぎりアクション」のチラシをキャンパス内に貼ったり周囲に発信していこうと考えている。
実際に社会で起きている問題についての意見や社会問題について書かれた賛同できる情報のシェアや実際に社会問題に関するイベントの参加した時のことや社会貢献に即した商品についての意見や感想をSNSに投稿しています。
SNS(Instagram)で活動内容を発信している。

受講後

社会へ発信とまではいかないかもしれないが、友人や家族などに話しながら取り組みの必要性を実感している。より多くの人に共感してもらうためにもSNSの効果的な活躍にも取り組んでいきたい。
食堂の食品ロス削減のための取り組み(小盛りなどができること等)のポスターなどでの周知。
SNSで自分の考えや自分の行っている取り組みについて発信しています。
学外へのプラントベースフードの普及。

★2023年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前23名 受講後20名

1.10 あなたは、SDGsの目標の実践が社会をより良いものにすると思っていますか。
(思っていない) 1←3→5→7 (思っている) (選択必須)

受講前

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	件数
1	0
2	0
3	1
4	1
5	4
6	9
7	8

23

受講後

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	件数
1	0
2	0
3	0
4	2
5	3
6	4
7	11

20

1.11 あなたは、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させと思っていますか。
(思っていない) 1←3→5→7 (思っている) (選択必須)

受講前

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	回答
1	0
2	0
3	1
4	1
5	6
6	6
7	9

23

受講後

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	回答
1	0
2	0
3	0
4	4
5	3
6	0
7	13

20

1.12 設問11で、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させと思っていますと回答した人（5～7のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのような点で成長できると思いますか。自由に記述してください。

受講前

今世界全体で環境や貧困・飢餓など問題になっていることについて現状課題を深く知ることによって人が暮らしやすい生きやすい世の中になるにはどのようなことが必要であり、私たちは何ができるのか知り行動できるようになると思う。

行動を起こすためには知らなければならず、知るためには自発的に現地に行くことや資料を集めることが必要だと思います。そのため、コミュニケーション能力・問題解決能力・積極性・自立性・向上心などが育まれ、自分自身が成長できると考えます。

実践するために、関連した様々な知識が身につく点。自分と異なる様々な価値観に触れることができ、自分の考えが広がる点。

目標を実践する上で、社会に関心を持つことができる点。

世界的な取り組みをすることで、さまざまな視点から物事を考えていくことができると考えます。

無駄になる資源や機会を減らすことができ、それを実践する過程で行動力を得たり視野を広くすることができると思う。

実践した分野についての知識が深まり、自分ごととして捉えることができるようになる

自分も社会の一員であることを自ずと意識させられる点。自分も社会に貢献できるということが分かることで前向きになり、自分に自信が持てるようになった点。思うような成果が出なかったとしてもこつこつと一生懸命取り組むことが大切だと分かった点。

周りに目を向ける力、協調力等を身につけることが出来ると思います。

地球環境に配慮した取り組みや、多様性を認め合う点で周りにも同じようにしたいといった影響を起こせる人になっていけると思う。

SDGsの問題解決策について話し合う際、コミュニケーション能力、様々な角度から物事を考える力を養うことができる。

生きることに関わるものごとに対して知識を持つことができるから。

やはり世界共通で同じ目標に向かっていくという点が大きいのと考える。自分自身も含めて国内で個人や企業が行う活動では、どうしても支援の対象者にしか目が向かないが、世界で行われている活動にも目を向けると同じ活動を行う団体や同じ問題を抱える人々など様々な状況を目にすることが出来る。また世界共通で同じ目標の元に活動を行っているという点で、互いの活動を参考にしたり、活動の幅を広げたり出来るという点にとっても可能性を感じている。これはSDGsならではの強みであると私は考え、自分自身も普段の活動からSDGsを意識し、より多角的な視点を持てるよう成長していきたいと考える。

価値観が広がる、当たり前前の定義がなくなる、偏見をもたなくなる考えを手に入れることで成長する

もっと自分自身がものに対するビジョンとか、物事に対する考え方の多様性の成長を楽しみにしています。国際の見聞とか、自分と違うもの事の好奇心はいずれに僕をさらに良い人に導ってくれる。

行動力、思いやりの心、相手の気持ちを考える心

SDGsの目標の達成に他の人との協力が不可欠である。プロジェクトやイベントの組織、他の学生や専門家との協力を通じて、コミュニケーションスキルを向上させ、協力して物事を達成する能力を養うことができる。

★2023年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前23名 受講後20名

目標を達成する上での、それぞれの視点から異なる考えや立場環境を知れるだけでなく、そのための手段。また積極性など性格の分野から変えることができる点と考える。

身の回りの自分が見えているものだけでなく、目には見えないけれど誰かのためになると考え行動することは誰にでもできることではないと思うから。

改めてこの世界の国際的にどのような問題を抱えているのか、また日本の世界に比べての実現率を見てどのくらい進んでいないのか進んでいるのかを客観的に見ることができるから、そのような点で成長させると感じている。

受講後

社会を俯瞰してみることができる

自分の考えをもって、世界の構造・現状を認識し対策を練ることができるようになる点。目標達成のため多くの人と関わり、人の思想の深い部分に触れながら意見交換をすることができるので、他者の意見を知ることができる点。

社会問題について自分自身が学ぶことができたり、その解決方法を理解できたりする。

自分の研究テーマとして、SDGsは大きな力を持っており、目に見える形なものであるため、明確な目標を立てやすく、その問題対策を考えていく事で発想力などを成長できる。

社会の現状を知り、自分でどのように携わり、解決する必要があるのか考える点において、自分のコミュニケーション能力やアイデア力、実行力、改善能力等が身につくと考える。

誰かのために役に立つことができる点

多分野の観点から効果や影響を考えることができるようになるから。

SDGsに関心のある多くの人達と交流したり、活動したりすることで知見が広がる。また、SDGsの目標の達成には活動だけではなく、活動を始めるにあたって話し合いや計画を立て、振り返ることが必要である。そのため自分の意見が言えるようになり、相手のアイデアをさらに引き出す質問ができるようになる。

物事に対する扱い方、平等という概念だけじゃなく、物事を理解の上で対等の認識を持つこと。

実践の過程で、思い込みや偏見を打破できる点。

自分自身、この授業を通して日常のあらゆる問題に対して「自分ごととして考える」ことの重要性を実感した。また、日常のあらゆる問題がSDGsに関連していることを学んだため、日頃から何事に対しても「自分ごととして考える」ことを意識して過ごしていることが成長出来た点である点と考える。

ある問題について取り上げる際には、いろいろな人の立場からものを考えることや調べることが重要になってくるため、意見の偏らないレポートづくりや社会に出た際に自分が行なっていることが環境や利益につながるかどうかを常に考える習慣をつけることができると思う。

進んで行動することの大切さ、継続することの大切さ、協力することの大切さ等の社会に出る上で重要なことについて学ぶことができる点。

SDGsへの取り組みを実際に体験することで、新たな学びを得ることにつながり、自分の計画していることにも生かして成長していくことができると考えています。

俯瞰的に物事を見ることができる。様々な価値観をもっている人と知りあえる。

★2023年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前23名 受講後20名

1.13 あなたは、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようと考えていますか。
(考えていない) 1←3→5→7 (考えている) (選択必須)

受講前

(考えていない)1←3→5→7(考えている)	回答
1	0
2	0
3	1
4	5
5	6
6	3
7	8

23

受講後

(考えていない)1←3→5→7(考えている)	回答
1	1
2	0
3	0
4	4
5	3
6	2
7	10

20

1.14 あなたは、SDGsの目標の実践に際して、仲間たちと連携しながら社会に貢献していますか。
(していない) 1←3→5→7 (している) (選択必須)

受講前

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	5
2	3
3	4
4	2
5	3
6	2
7	4

23

受講後

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	3
2	0
3	0
4	4
5	7
6	2
7	4

20

1.15 設問13と14のいずれかで、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようとしている、あるいは、既に貢献していると回答した人（5～7のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのような貢献をしようと、あるいは、既に貢献をしていますか。自由に記述してください。

受講前

まずはみんなの働く環境と、経済を良い方面に発展する、日本はいま経済不景気とよくいわれます、だから日本への活動はきっとよい実験場になるでしょう。
ゴミ拾いや、フリーマーケットなどを通して環境保護に貢献したい。
資源を大切に使うことで人や動物が長く安心して暮らせるようにしたい。
「おにぎりアクション」だとか、Unicefだとか、既に活動をしている様々な団体との連携をしていきたい。
実践せねばという意識はあるが、正直自分にそこまでの熱意も行動力もない。しかし、高い志を持ち頑張っている人の力になりたいと思っている。自分のできる範囲でボランティアや講演会に参加している。さらに頻度や範囲を上げていきたい。
同じような問題意識を持って、より具体的な目標達成に向けた計画を立て、貢献していきたいと考えています。
SDGsの目標の実践をしている団体に入っている。
自分一人では実現できないことも他の人も協力することで実現したいです。
富士山でのゴミ清掃や多文化理解などを深めて実際に相談会などにも参加している。また、議員さんと会話する機会があった際には提案をするなども行っている。
地域活性化のために、遊休農地という高齢化等が原因で使われていない畑を活用して、ひまわりを育て、そのひまわりから取れた種でオイルを絞り、化粧品を作るプロジェクトを行っています。作った化粧品は、地域のふるさと納税返礼品として採用され、地域の経済活動へ還元しています。
板倉キャンパスでSDGsアンバサダーとしてSDGsに関する企画を立て、話し合いを進め、学部内外に関係なく多くの学生を巻き込んでよりSDGsに関心を持ってもらえるよう広報した。また実際に今年の9月に板倉キャンパスの学生を中心として富士樹海の清掃ボランティア企画を計画し、実行して振り返りをした。
人々が目を向けない社会問題を広めていきたい。
海岸清掃を実施したり、貧困地域の子どもたちに向けて寄付を呼びかけたりした。
設問5で回答した献血のボランティアは、1人では行うことが出来ず、チームのメンバーと協力することでより高い成果が得られる。このため仲間との連携や協力は必要不可欠であり、また結束が強くなればなるほど活動の幅が広がり、より多角的に社会に貢献できると考える。このため自分自身は普段の活動からメンバーとのコミュニケーションは特に大切にしており、メンバーの意見を積極的に取り入れながら活動を行っている。
学内外問わず少しでもSDGsに関心を持ってもらう。
このような授業に参加しSDGsについて議論したり、改めて考えようとしていること自体が社会に貢献しようとしていることだと感じる。

★2023年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前23名 受講後20名

受講後

SDGsアンバサダーのメンバーとして、次回スペシャルオリンピックスの講演会、体験会に参加する。
SDGsの存在自体を広げ、認知度を高めていきたい。
SDGsアンバサダーの防災まちづくりチームに所属し、そなエリアなど企画に参加しています。そういった課外活動や普段の講義で知識を蓄えて自分なりに考え、自分の中の理想と現実世界を繋げていくことで、将来どのような仕事について貢献するか考え中です。
ウォーターサーバープロジェクトの参加により、ペットボトルごみの削減などを図ろうとしている。
まだ実施には達していないが、食品ロスやプラスチックごみの削減のために生徒で企画をし、企業や他団体に協力をあおいでいる。
fuji清掃活動をさんかし、環境をよりよくなること。
co2削減に向けた取り組みによって貢献できるよう、イベントなどに積極的に参加しようと思っています。
1ドギーバッグの入手先を調べる 2ドギーバッグの使用方法や注意点をまとめる 3ポスター制作 4ドギーバッグを導入するメリットを調査してまとめる
ゴミを減らすことで持続可能な社会を実現することに貢献することや子供支援と通した教育支援や貧困対策に貢献すること。
仲間と一緒に防災に関する企画を作ったりして貢献していきたいと考えている。
ひまわりプロジェクトと言う、遊休農地(高齢化等が原因で使われていない畑)を活用してひまわりを育て、ひまわりの種から採れたオイルで化粧品を作る、と言うプロジェクトを通して、地域にお金を還元している。(ふるさと納税の返礼品として、購入してもらうことで、地域に貢献している。)
仲間と連携することで1人では成し得ないことにも取り組むことが出来るようになる。またより多角的な意見を踏まえた取り組みが行える点もメリットであると考え、これからも周囲と連携した取り組みに挑戦して社会に貢献したいと考える。
他大学の人と連携。

1.16 その他、何かあれば自由に記述してください。

受講前

私の中で、SDGsはよく聞く言葉ではあるが、自分事としては全く捉えられていないので、自分の中でその意識を変えていきたい。
--

受講後

1学期間、ありがとうございました。SDGsについて知らないことが多かったのですが、この授業を通して、各ゴール・アクションについて学ぶことができました。今までの授業以上に挨拶や話し合いをすることが多く、積極的に授業を受けられたと思います。まだまだ未熟で無知なところも多いのですが、少しずつ前に進み、人と協働しながら社会をよりよくしていけたらと思います。ありがとうございました。
今の現状を知り、自分には何が出来るかを考えることができて良かった。
日本を出る気はなかったのに、講義を受けて視野が広がり、地球全体のため海外でも何か貢献したいと思うようになりました。知らないことを知れて、とても楽しかったです。
秋学期の間、ありがとうございました!
SDGs実践講座では知識だけでなく実施に向けた行動や話し合いも必要になるため、自発性と協調性の大切さも学ぶことができました。座学だけでは得られない経験ができて楽しかったです。また、周りの人から沢山の刺激を得られる良い機会でした。後期の間ありがとうございました。
半年間ありがとうございました。多くの受講者の皆さんと深く考え、意見を交換したことで自分にはなかった視点からも考えることができ、とても充実した学びを得ることができました。
自分は4年生なので卒業してしましますが、SDGs関係でまた学生や大学関係者の方々とも関わり、活動できたらいいなと思います。短い間でしたがありがとうございました。勉強になりました。
半年間、ありがとうございました!とっても楽しい授業でした!

SDGs 実践講座最終レポート①

私は SDGs の 17 目標とその進捗状況に興味があり、本講義を受講することに決めた。私が最も興味関心があるのは目標 11 の「住み続けられるまちづくりを」だ。持続可能なまちづくりとはどのような姿なのか非常に興味があり、自分の中で目標 11 をメインに据えて考えていたが、講義を受けていく中で考えが変化した。講義の中で 17 目標について理解を深めていったところ、どの目標も重要で危機感を抱かなくてはならないものであることが分かった。飢餓、貧困、健康問題、衛生環境など、日本で暮らしていて特段困ることのない生活を送ってきたためあまり気に留めていない問題だったが、講義を受けていく中で現状を詳しく知ることができた。あまりに日本と異なる環境であり、熱心に活動している人任せな自分の現状に心苦しさを感じる。目標 11 に限らず、SDGs 目標達成のため何かアクションをしたいと思うようになった。

そして、特に心に残った授業回が二つある。一つ目は、第十二回講義「security を再考する」だ。本講義の目標は「エネルギー安全保障」という言葉に投げ込まれた多様な意味、「安全保障」と「安全保障化」の理解だった。エネルギーは国家の安全保障だという考えは、少し説明されれば分かる当たり前のことだったが、私は盲点であり非常に興味深い授業回となった。私はロシアが隣国だという意識が全くなく、日本の中でも住んでいる地域で他国に対する認識が違うのだと初めて知った。日本はエネルギーを輸入している国であり、ロシア・中国・アメリカと大国の隣国の島国だ。戦争での惨殺のこともあり、EU と同様にロシアからエネルギーを輸入することに抵抗はあるが、すぐに一切の輸入を断つというのは難しい。エネルギー大国ロシアのエネルギーの武器化は脅威であり、武器化の風潮が広がることは避けたく、EU の姿勢に賛同する。私にとって不思議なぐらい横暴なロシアの態度は、エネルギー大国ロシアならではの振る舞いなのだと学んだ。理想としては自国で生成した再生可能エネルギーを主なエネルギー源としたいが、日本国内で脱露の考え方が全く異なるのですぐに大きく動くことはできない。日和見するということのもずるい態度だとは思いますが、今は最終的に決定をする政府への信頼が落ちているので、政治への関心を持ってこれからの日本と日本国民の生活を考えて政治参加することが若者にできるアプローチだと考えた。私は本講義を受けるまで、エネルギーに対して「安全保障」の問題として認識していなかった。政府に対して頼りないという印象を持っている人が少なくないので、これからの国を左右する大きな決断をするには、国民も納得するように国民がちゃんと政治家を選ぶべきだろう。私も、選挙ではエネルギー政策への言及をよく加味して選びたいと思う。17 の目標の中に「戦争をやめよう」がないのはなぜか、それは 17 の目標を全て達成した時に戦争は起きなくなるからだ。冒頭で話されたこの話を念頭に置き、非常に難しい議題を考えた本講義は、講義内にグループワークの時間があってもその場でうまく自分の考えをまとめられなかったかもしれない。ニュースをちゃんと見てエネルギー政策の動向を把握し、自分の考えを持つようにしようと思う。とても内容の濃い授業回であった。

二つ目は、第十三回講義「スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境」だ。スウェーデンのユートピア思想を起源に持つ「近隣住民同士で、共同の食堂や各種余暇施設をともに利用しあう住まい方が理想的である」という主張は日本では広まるのが難しいような考えであり、興味深く面白く感じた授業回となった。その考えからセントラル・キッチンが存在したことに驚きだ。家事の効率化という発想が元だと思えると納得する仕組みでありおもしろい。産業革命に乗り遅れ早くに人口減少の問題を抱えたことで「国家の家」「人口問題の危機」が発表され、少子高齢化対策・女性の社会進出・良き民主的な市民の創出が議題に挙げられたことは、その時代で先進的な考えであり現代日本が参考すべき例だと感じた。特に、政治に関心を持ち積極的に選挙に参加する民主的な良き市民が、今の日本に必要なものだと思う。何年もかけて国民を育てて意識を普遍的なものにしたスウェーデンのやり方は、マネしてもすぐには効果が出ないものだが是非とも取り入れて欲しい。コレクティブハウスは家事・育児を分担することができ、少子高齢化の進む日本にあって欲しいシステムだ。人と人の繋がりが希薄になっていく近年、寂しくならない生活様式というのは需要があるだろう。しかし、寂しくならない一方でなかなか 1 人になれないという大きな問題がある。日本でも行うとしたら、同居人が精神的に負荷のかからないように自分の特性を伝えたとえでのルール決めが肝だ。他人と一緒に暮らすことは多くの人にとってハードルが高いものだが、向いてる人というのもいると思うので生活様式の選択肢としてあって欲しいと思う。日本で普及するには時間が必要だろうが、同居人のマッチングアプリを作るなどして気軽に選べるものになると嬉しいと、グループワークで意見交換するうちに思った。

講義を受けグループワークをしたことから、講義を受ける前よりも考える力がついたように思う。自分の考えをもって、世界の構造・現状を認識し対策を練ることができるようになった。加えて、目標達成のため多くの人と関わり、人の思想の深い部分に触れながら意見交換をすることができたので、他者の意見をたくさん聞くことができ大変ためになった。講義の内容に対して人の考えは多様であり、自分では感じないような思いつかないようなことを意見出しされたときは、グループワークの良さを実感した。第十二回と第十三回講義のように、私はこの SDG s 全学総合を通して自分が思いもしないこと、自分の知らない世界を知ることができた。数々の講義、グループワークの意見は更に学びを深めるとっかかりをたくさん作ってくれた。今後は講義でできた多くのとっかかりを元に自分なりに調べていきたい。

私は今まで、自分のできる範囲で募金やボランティアを行い、将来は日本国内で目標 11 に貢献できる仕事に就けたらそれでよいと考えていた。海外にはあまり興味がなく、日本でまちづくりに関わり、その地域に住む人の幸せを守るつもりだった。しかし、SDG s 全学総合を受講したことで海外にも視野が広がった。自分を中心としたごく一部の人間の生活水準を維持・向上したって、私はどこかの国の生活が苦しい人の助けにはならないのだと悟った。自分がなかなかいい生活をしている一方で、生活基盤の根本から違う人たちがいると思

うと心臓に負荷がかかる。きっと、将来今の予定どおりに就職したとしても、自分が何も力になれていないことに心がざわついたままになるだろう。こういった自分と同じ性分で、目標達成のためにアクションを起こすエネルギッシュな人が講義を受けている人にはたくさんいた。講義・グループワークで学んだこと、身についたことを活かして、自分がやりたいこと自分ができることを考え見つけ行動していきたいと思う。実際に行動に移している人は結構いて、彼らとのつながりを作ることができた。今後の大学生活・将来にとって、大学一年生で本講義を受けたことは幸運だ。

SDGs 実践講座最終レポート②

今回、SDGs 講座-17 ゴールへの第一歩-を受講した。講座を受けて、改めて SDGs17 の目標を達成することはとても大変だが、達成することができると、地球、世界は確実に良い方向に動いていくと再確認できた。講義内容は講義を聞くだけでなく、グループワークが頻繁に行われていた。グループも毎授業異なっていた。グループワークを実施したことにより、考え方が様々な意見を多く聞くことができた。特に上記の点が今回の講座を受講して、良かったと感じた点である。

全講義の中で特に心に残っている講義が2つある、その講義は第6回と第7回の講義である。第6回目の講義では植物の観点から SDGs について考え、意見を出し合った。私は現在大学でベジプロ東洋という学生団体に所属し、プラントベース食が身近な存在になるように活動している。大学でこの活動を通して、食という観点から SDGs にアプローチできることを知った。私たちが食という観点から実践できる第一歩は一日一食ずつでもプラントベースの食に変えることだと思う。また私は過去にヴィーガン生活を実践していた。実践している動機としては動物由来である食品を食べないことで、少しでも環境に対する負荷を減らしたいというものであった。さらに6回目の講義で牛等の家畜を育てるためには莫大の量の穀物が必要だと知った。今まで私はヴィーガン生活をしていて、1人の力では環境に対しては何も変わらないのではないかと考えていた。しかしヴィーガン生活することで穀物の消費も抑えられているのだと思うと、一人がそのような食生活に変えると環境に対して多少の影響はあるのだと思い、今取り組んでいることは無駄ではないと再認識した。第7回目の講義では、パートナーシップについて考えた。講師の先生が仰っていたことで、自分が今まで考えたり、行動してきた、本当に多くの共感する部分があった。その中でも特に共感した部分は「自分から行動する」、「カンと想像力」である。「自分から行動する」に関しては、大学に入学後に気付くことが出来た。高校までは自分からアクションを起こしてこなかったため、周囲の人だけと関わりが続いた。しかし大学では自分から動くことを強く思い、アクションを続けてきた。アクションを続けていると、今まで聞いたこともないような情報、様々な知識、スキルを持っている人に次々と出会うことが出来た。「カンと想像力」については前述した「自分から行動する」と繋がっていると思う。自分から行動することで多くの活動へ参加をいただいた、活動に継続的に参加していると、今度はリーダーへの挑戦の機会、リーダーへの誘いをいただいた。まずいただいた話にチャレンジしていると、次第に見方、視点が変わってくる。そうしていくことで「カンと想像力」もまだまだ先輩方には及ばないが、付いてきたと約1年間活動してきた、日々感じている。今後も「自分から行動する」、「カンと想像力」を心に留め生活していきたいと強く今でも思っている。

そして今後は、SDGs 講座-17 ゴールへの第一歩-を受講して、得た知見を活かして行動していくことが、非常に重要だと考える。その中で最初に実践していきたいことが、学内外でのプラントベースフードの普及活動である。プラントベースフードというと、一般的に普及し

ている感じ方は、ヴィーガンやハラールなどの方々の食事面での不平等がある方々の食事であるだと考えている。もちろんプラントベースフードの良い面は上記の点である。しかしプラントベースフードには他にも様々なメリットがあること、食の不自由がない人が食べるメリットも認知してほしい。私を知る食の不平等を無くす以外のプラントベースフードのメリットは、動物愛護、生活習慣病リスクの軽減、地球の環境保護である。動物愛護の面では、人は動物の命をいただき、生きていけているのだが、必要以上に動物を摂取している人がいる。プラントベースフードを食べることで人と同じかけがえのない命をもっている動物の命を殺めることを減らすことができる。生活習慣病リスクの軽減の面では、データとして、肉、魚などの動物性の食物を多く摂取している人の方が生活習慣病にかかるリスクが高まるというデータが出ている。最後に地球の環境保護の観点である。プラントベースフードを食事に取り入れることで、家畜の飼育数を減らすことや水資源の節約にもなる。その理由としては、畜産動物を飼育するのに比べ、植物を栽培するのに使う水の量は圧倒的に少なく済むことが挙げられる。畜産動物を飼育するためには、動物が誕生してから食肉として出荷されるまでの年月の間に、大量の水を使用する。畜産動物に与える飲み水だけでなく、動物が食べるえさを育てるための水やりも必要となる。世界では気候変動による干ばつや水不足などの問題が深刻化している。そのような問題を解決するためにも、プラントベースフードは大きな役割を担っていると思う。以上の3点が私を知る食の不平等を無くす以外のプラントベースフードのメリットである。しかしプラントベースフードは一つの選択肢であって、必ずしもメリットだけではないことも伝えていく必要があると強く思う。

SDGs 実践講座最終レポート③

【全体の概要】

「SDGs は SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS のことで、地球上のすべての人が関係している問題を 2030 年までに解決しようと 17 の目標を掲げている。」と講義を受ける前は自慢げに話していた。このように私は SDGs についてよく知らない側の人間であり、自分でできることは頑張っている会社や団体を応援することや省エネな暮らしとゴミをきちんと捨てることくらいだと本気で思っていた。もちろん今回の講義で、個人レベルでもできることは意外にも多くあることを学ぶことができた。ところが前述の通り「自慢げに…」とあるように、私の浅い浅い知識でも家族-友人間では SDGs について知っている側に立つことができるという事実を踏まえると出来ること、知っている私たちがやらなければいけないことが沢山あることが分かった。今回全体を通して強く感じたことは、SDGs について関心を持ち、進めるのは若い力だということだ。今、力をもっている大人が頑張ってくれる様子を眺めているだけでなく、情報発信、協力を仰ぐなど小さなことからコツコツ行なっていく必要がある。

【心に残った授業回】

北脇先生の衛生教育についての授業と市川先生のエネルギー安全保障について考える授業が心に残っている。受講前の私は発展途上国の衛生教育に関して、頭の中で「きれいな水を使えない人が多くいる」というイメージだけで完結していた。そのため、「井戸を掘れば良い」「浄水システムを整備すれば良い」という独立した技術支援のみで足りると思っていた。ところが実際には、水そのものがない、自然による汚染、排水による汚染、病気への対応などが必要で 21 世紀に入っても難しい問題のままなのだと学ぶことができた。特に驚いたのは講義内でそれぞれの国の様子を写真で見ながら北脇先生の現地でのお話で何う時間があった。ここでは写真の現状と昔の日本を比較することやそれぞれの土地の特色を知ることができたのだが、ベトナムの道が舗装されていないところなどの裸足でいけないところには支援団体等が向かうことができずに整備が進まないという話を伺うことができた。支援団体は支援が必要な場所にはどこにでもいけると勝手に思っていたので、大敵が舗装されていない道だとは意外であった。このような道が舗装されていない地域というのは十中八九屋外排泄であり、本当に支援が必要なところである。このような本当に支援が必要なところに支援を届けることができないことは、想像をしたことがなく講義全体を通してとても心に残った内容であった。市川先生の講義ではエネルギーと政策について学ぶことができた。とても大事な内容であるのに日本での扱いはあまり大きくなく、ガソリンの値段だけ気にしているような今日である。本講義により改めて考えるきっかけとなった。ウクライナとロシアの戦争以降、ガスを武器化したロシアに対して EU 諸国が対応していく国家レベルの緊張感、エネルギー政策をはじめとする今までにない視点をこの回は与えてくれたように思う。この視点を維持したまま日本を見てみると、ロシアを隣国に持つ日本でエネルギー

ギーに関して「安全保障」の問題意識をもって生活をしている人は少なく、少し怖いぐらいの平和ムードだなと感じる。また、外務省と経産省と市川先生の三方それぞれの立場は現場にいる人しか分からないことなので、オフレコではあるもののとても勉強になった。同じ国の行政機関に属す人間であっても同じ考えではないことには驚いた。まだウクライナとロシアの戦争は続いており、いつ日本が窮地に立たされるかは分からない、話を聞いた限りでは目前のように感じる。大人が頑張ってくれている様子を眺めているだけでなく、日本のこれからの身の振り方を大人も若者も一緒になってきちんと考えていく必要は確実にあると感じることができた。

【身に着いたこと】

本講義では SDGs に関する各講義によってそれぞれの目標に対する取り組みの例や新たに浮上してきた意識や国の特色による問題点などから今までにない多様な視点を得ることができた。この視点によって各目標の理解が進んだと勘違いかもしれないが感じている。そして前述の通り、こんな大学生の私にも出来ること、知っている/学んだものとしてやるべきことがあるということが身についたと思う。

また、グループワークでは背景が異なる人同士での話し合いを進めることの難しさを感じた。途中まで2、3人で話し合いを行っていたが、比較的スムーズに進んでいたと思う。しかし、4人になった瞬間に意見が離散しはじめた。これには4人集まることで意見が豊富に得られたことが原因だと考えられる。そこで私は一応最高学年としてスチュエーションリーダー（司会）として話し合いを進める力をつけることができた。自分の意見を押し付けずにみんなの最善解をさぐりさぐり探し当てるという経験は難しくも新しくプロジェクトを起こす進める際に大いに役立つと考える。

【これからどう活かすか】

17の目標を一つひとつ見たことがある人がどれ位いるか。その中でターゲットにまで目を通したことがある人がどれ位いるか。私は17の目標は一通り目を通したことがあったが、字面を正確には覚えてはいなかった。それでも SDGs を知らない人なんているのと言える側にはいた。もちろんターゲットなるものがあることが知っていたのだが、目を通そうとも思わなかった。このような経験から SDGs の世間の認知度は9割越えとなつてはいるものの、実際何をすべきなのか、具体的にはどのような問題があるのか7割近くの日本人がSDGsの9割も把握していないということが言えそう。したがって、SDGsについて知っている/学んだ者として各目標と各ターゲットについての発信していくことが重要であり、小さな活動の一步目としてSNSでターゲットについて発信していきたい。また、次のステップとしては町役場の方や高野祥子さんと協力してブラジル人や他国籍の多国籍の方たちのために何が出来るかインタビューや相談提案を通して進めていきたいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート④

この SDGs 実践講座の講義では、環境や社会、経済に関わる 17 個の目標と 169 のターゲットについて、それぞれが主体的になって取り組む授業でありました。「誰ひとり取り残さない」という理念のもと、各回の講義テーマに沿って、グループディスカッションでは意見を共有し、改善に向けたより良い提案に繋げることができました。詳しい内容としては貧困や教育、環境など多岐にわたり、自分があまり詳しくなかった分野についても理解を深めていくことができました。

また、最終回のグループ発表では具体的なアクションプランを計画することもでき、自身の興味を持ったテーマについて仲間と話し合っ作り上げることができました。発表した内容について、友人から授業後に改善点についてアドバイスをもらうことができ、それを活かし講義が終わった後でも実際に発表した取り組みにチャレンジすることができるのも、この講義ならではの魅力であると思いました。全体の講義を通しての目標である自分ごととして捉えることについては、積極的に参加することで身についたと感じており、今後社会人として活躍していく際にも、企業での取り組みに繋げていくことのできる、とても有意義な学びができる講義であったと思いました。

私は、第 11 回の海洋プラスチック問題における授業が最も心に残りました。講義の中で、2050 年には海洋プラスチックの量が海の生き物の重量を超える可能性があることはとても印象的でした。海洋プラスチックを減らすには私たちにとって身近であるレジ袋やペットボトルの削減が最も効果的であります。そして、海洋プラスチックは海の生き物が漁網に絡まって衰弱したり、ビニール袋を大量に誤飲して死亡してしまった事例を知り、痛ましく思いました。この要因によって起こる事象は、私たちがプラスチック削減に向けた行動だけでなく、漁業者による漁を行う際、破れた網などは放置せずしっかりと責任持って回収することも徹底しなければなりません。また、この講義の後からは、私自身もマイバックや水筒の持参についてより意識的に取り組むようになりました。

ですが、このようなプラスチック削減が進んでいる中でもビニール袋を無料で提供しているお店やビニールで過剰包装されている商品も見かけることがあります。今後削減していくためにも、効果的な対策をした会社への補助やビニール袋の値段を大幅に上げる取組をすることが必要だと思いました。私は、この海洋プラスチックにおける問題は大学の SDGs アンバサダーとしての責任感を持ち、改善するための行動をしていきたいと改めて感じました。

私は、この講義を通して考えたことを行動に繋げる力や分析する力が身についたと思っています。最初の複数回では、週ごとにさまざまな受講者の方とテーマについて話し合い、ディスカッションでは自分では思いつかなかった案などを共有することができ、SDGs の他の達成目標について考える際にも活かすことができました。

また、各回のテーマにおいてどこに問題点があるのかを見つけ分析し、そこからどのような

取り組みが必要なのかを考える機会が多くなりました。特に第 5 回の移民と難民のテーマで考えた時でした。プッシュ要因とプル要因がある中、人それぞれが何らかの悩みを抱えているため、共生するためには互いの文化を知る必要があるため、さまざまな立場になって分析し、考える力をつけることができました。その後のグループワークで移動する時に持ち歩くものについて考えた際、複数の条件のもと自身の必要なものと照らし合わせ、分析する力につながったと感じています。

また、講義で得た知識を自身が今後、取り組んでいきたい課題に対して具体的な策を考え、行動に繋がれるようになったことは、この講義での学びを活かすことができたからであると考えています。

私は、この講義を受講する前からカーボンニュートラルに最も興味を持っていました。ですが、受講を重ねるにつれて食品ロスや貧困といった問題についても深く興味を持つようになりました。そのため、今後は多くの問題を関連させることで、解決していけるよう行動したいと思います。その中で、私が最も興味があるカーボンニュートラルの分野における持続可能な燃料(SAF)について、多くの人に知ってもらいたいと考えています。SAF の多くは航空燃料として使われる割合が高くなっており、従来の化石燃料と比べ二酸化炭素を 80%削減することができるとされています。ですが、問題点として製造コストが高く供給率が低いことがあります。SAF において最も重要なのが、私たちの生活の中で出る廃食用油をリサイクルすることで航空機の燃料に変えることができます。現状として、石油を原料とする航空燃料は輸入の手段しかありませんが、SAF はバイオマスなどの植物や廃食用油が原料であるため、国内で生産することができます。このような SAF の国産化における気候変動問題の解決に向けた取組の一環として、このような事例もあることを、多くの人に広げ、一体となって取り組んでいけるような仕組みづくりを考えていきたいと思っています。

SDGs 実践講座最終レポート⑤

まず私がこの授業を受講しようと考えた理由として、最近より一層テレビやメディア、大学の授業内で頻繁に「SDGs」という単語を聞くようになったが、実際に世界各国ではどのような問題が起きているのか、またその課題を解決する上で企業や国という大きな存在が解決に向かいやるべき事やできる事ではなく、私自身という一個人としてどのような事をすれば解決に貢献できるのか？と気になったからこの授業を受けようと決断した。

そして授業内容についてだが、まさしくこの授業を受講しようと思った理由を十分に達成できる授業内容だった。始めに「個人個人でこのような事をすれば解決の一步になる。」と直接的に解決方法を言われるような授業ではなく、考える時間や意見交換、皆で解決方法を探せるようなグループワークを毎回挟んでくださっていたので授業を聞き自主的に、この問題の現状はこうで、こんな課題があってなどとまとめて自ら自分なりの答えを探ることができた。またそれをグループワークで話し合う事でこのような考えやこのような答えもあるのかと知ることができ、より一層自分の考えをもっとこうしたら良いのでは？と気づき考えることができた。

授業と平行し SDGs 内の同じ課題に興味を持つ4人でチームを組み授業時間外に LINE や Zoom で集まり、その課題についても何が今の問題で、どのような事をすれば解決に向かうのか、また一個人としてその課題に対してどう行動をとれば良いのかについて話し合う事ができた。そしてそれをスライドにまとめ発表することで、その課題に関する知識や考え、解決策やアクションについては勿論、1つのチームで何か1つの事に対して話し合い意見をあげ、スライドを製作し練習し発表することで自主的に考え、行動する力や他者と協力し課題発見、課題解決する能力が身に着いた。

そのためこの授業全体を通し SDGs に関する現状や知識はもちろんの事、課題を発見する課題発見能力とその課題はどのようにしたら解決するのかという解決方法を考える能力が身に着いたと改めて感じた。

そして次に心に残った回について、14回ある講義の中で一番心に残った回は第4回の「カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか？」という小瀬先生の授業だ。まずこの授業では、カーボンニュートラル(=脱炭素社会)について学び、東洋大学の川越キャンパスにて実際に行っている事、そしてその効果がどのくらいなのかについて授業内で扱っていた。その後グループワークにて「脱炭素社会に向けて学生や大学で実施できることのアイデア」について話し合い、案を出しそれについて発表するというグループワークを行った。

肝心の何故この回が1番心に残ったのかという理由についてだが、目の前にある課題を解決することのみを考えるだけではうまく解決せず、物事全体をよく見ないとダメだと身をもって知ることができたからだ。

そのことについて身をもって知ることができたグループワークの際、私たちのグループ

ではペットボトルに目を付けマイボトル持参を呼びかけるという案が出た。大多数の人が毎日使用し、必要不可欠な物なのでその分マイボトルになればプラスチック使用量を大幅に減らせると考えたからだ。またそれに肉付けする形で、校内の自動販売機にてペットボトルを購入する人もいるし、家からマイボトルを持参したとしても飲み干した場合校内で追加ができないと自動販売機で購入することになってしまうので、校内にウォーターサーバーを設置するという意見が出てこの案にしようとなった。しかし深く考えてみると、マイボトルの持参は促せることができペットボトルの使用量が大幅に減少するが、ウォーターサーバーを設置することにより生じる、コストや電力、環境についての配慮を考えていなかった。そのためこの案は没になってしまった。

このように課題に対して解決策を考える際、今日の前にある課題に引っ張られすぎたり、無意識にその課題のみを解決する事しか考えておらず、全体的に見たら何も変化していなかったり、何なら今以上に悪化しているという事が起こりうると身をもって知ることができた。また上記の案だけでなく、話し合いの中で何度もこのような事に直面し改めて何かの解決策を考えるという事は難しいと感じた。

また最終的にゴミを捨てる際、捨てたいゴミの分別方法がどれに当てはまるのかが分からない、分かりづらいという意見がグループ内で複数上がり、ごみの分別表記を分かりやすくしようという事になった。これに肉付けする形で、頻繁にごみとして出るが利用者がよく悩む物のデータをアンケートにて収集し統計を取り上位何種かをごみ箱付近に張り紙として貼るという意見を最終的にグループの意見とした。

またこのグループワークを得て何か物事を解決しようとする際には、当事者の意見が大事だと改めて感じる事ができた。最初のマイボトルについて、グループ内にマイボトルを日常的に使用して要る人がおらず、〇〇だと思ふなどの推測で話を進めてしまっていた部分がある。そのため意見に具体性が欠けており、あまり意見も出ず活発な意見交流ができなかった。

しかしゴミの分別では、グループ内に当事者が複数いた為、●●が不便、このようにしたら分かりやすいかも、といった具体的な意見が出て議論が活発にできたし、案も具体的に現実的に考える事ができた。また当事者でない人は話し合いの時置いていかれるのでは？と考えるかもしれないが、当事者からの具体的な意見を聞きその場面を想像しやすい、確かに言われればそうかもしれないと考える事ができたと言っていた。

以上の事から、何かの解決策を考える際には当事者にならないと分からないし、その場が想像しづらく具体的な案がでずより難しいと感じた。しかし必ずしも自分が解決したい問題全ての当事者になれる訳ではない。そのため自分が当事者ではない場合は、当事者を含め議論をする場を設けることや、実際に当事者にどのような点が不便で、不満なのが、どのような物を求めているのかなどを複数人から聞く必要があると感じた。当事者は〇〇と思うよ。など推測で話して置いていかない事が重要だとも考えた。

最後にこの授業を通して沢山の知識を得て、身に着いたことも沢山ある。これから何か問

題に直面し解決しないといけない場面や何か問題について考えなければいけない場面。自分の意見や考えを持ち、誰かと話し合い協力し解決する場面に遭った際、今回の授業を得たことを活かし、積極的に議論し、具体的な意見を出し、良い解決策を出せるよう活かしていきたい。

また SDGs についても沢山の知識を得ることができ、現状や問題についても知ることができた。新たに知ることができた知識を生かし自分ができるアクションをしていきたい。また今回の授業を受け SDGs に対してより興味を持つことができたので何かイベントに参加してみたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑥

全体の概要

「SDGs (Sustainable Developmental Goals)」という 2015 年 9 月に国連サミットで採択された国際目標について、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶ授業であった。さらに、実践ということで、学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に变化させて行く」ことが重視されていた。第 1 回目では、東洋大学の SDGs に対する方針や理念について学んだ。その後の回では、各 SDGs のゴールに関連した授業で、各分野を専門とする担当の先生の授業を受けた。

心に残った授業回

印象的だった授業は、第 13 回「スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境」と、第 14 回「未来の仕事 働きがいと新しいテクノロジーから考える」だ。

第 13 回では、ヨーロッパにおけるコ・ハウジングの発祥から、実際にスウェーデンで行われている例まで学べて、興味深かった。SDGs11 の目標「住み続けられるまちづくりを」は、日常で意識することがなく、SDGs のゴールの中でも関わりが薄いものだった。しかし、この講義を受けて、日本のように高齢化が進む社会だけでなく、あらゆる社会でこうした共同生活が実現すればいいなと感じた。もちろん、良いことばかりではないし、規則を設けたり入居を厳しくしたりしていく事で解決をしていくことが求められる。何しろ人間相手のため、解決できない問題もあるだろう。そうした問題は今後の課題となるが、モチーフとしては面白いと思うし、高齢になって無気力になる人が減ると考える。特に、例に挙げられていたシニア型のハウスでは、音楽室や体操部屋といったものもあり、身体が不自由な方でも訪れやすいと思った。日本でいう、公民館的な存在のものに、住居がくっついているようだ。コモンミール活動については、チーム、グループを構成する上でうまく調整できるのか悲観的になってしまうが、ある程度の自由度のある中でできるとよい仕組みだと思った。

第 14 回では、ワーク・エンゲージメントについて学び、就職活動では表面的にしか働くことについて考えられていなかったなと思った。ディーセント・ワークの促進という目標の達成には、一部の環境でしか改善されていない現状では足りないと思った。また、親が誇りをもって働いていないと、子どもも働くことが楽しいとは思えないだろう。天職を見つけることは、自己理解なども必要なので難しいだろうが、たとえ天職と思えなくても、この仕事を明日もすることがつらいと思わないような環境に全員がなるようには変えていかなければ人間の幸福度は下がっていくばかりだと思った。そして、子どもも将来の仕事を選ぶときに親がしている職業以外やニュースできついと言われていない仕事という基準になっていくだろう。そのため、人間の労働力搾取だけでないような働き方の改善やインセンティブが求められると考えた。

身についたこと

幅広い点から物事を考える力、私は知らないことだらけであるという気づき、長年にわたって研究をしている研究者の発見でも小さな一歩だということだ。私は、自分が何かをして大きな影響を与えたいと思いがちなのに何もできなくてフラストレーションがたまるといふ悪循環にいた。多くの活動は、実際はとても小さな変化であり、それをすることで環境問題や差別がすぐになくなるものではない。日頃メディアを通じて、この活動をしている人はすごい、これを全世界でやれば平和になると感じることはあるが、それも私からしたら大きくても、とても小さな一歩なのだと思う。その一歩を何人もいろんな場所ですれば世界的に近づいていく、または、別の方向に進んで離れた方向に進み、一生出会えないこともあるかもしれない。自分の一歩が小さすぎて、一歩踏み出すことすら怖くなっていたが、この講座を通して、小さな一歩で前に進んでいるように見えなくても、それが当たり前だから踏み出そうと思った。

これからどう活かすか

私は、SDGs について、人よりも関心が高かったかと言われると大幅に高かったとは言えない。しかし、人権や環境、持続的な未来のために何かしなければまずい、考えるにあたって現状の問題や解決のために行われていることを知る必要があると思い、この講座が大学を通してできる始めの一歩に感じ、受けることにした。

この講座では、すでに社会課題に関心のある人が多かった。私の何倍もすでにボランティアをしていたり、周りを巻き込みながら大規模な企画をしたり、どこからモチベーションが来るのかと聞きたくなるものも多かった。時間のある学生時代だからこそ、人助けや社会を変えていくことに尽力し、いろいろな気づきを得られるのだろうと思う。私はコロナ禍や人間不信を理由に、ボランティアなど社会との関わりを持つ機会を作ってこれなかった。小さなコミュニティー（サークルや団体など）にも所属しておらず、人を先導したり、協働で革命を起こしたりしていない。今後は、コミュニティーに所属し、社会のためにできることをしていきたいと思う。その上で、周りに与えられる人になるためにも、自分に余裕を持てるような生活を確立していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑦

私は SDGs 実践講座を受講しようと思ったきっかけは、近年 SDGs やサステイナブルという言葉が普及しており、よく耳にしたからである。実際に SDGS の目標達成の取り組みをテレビで見たことがあり、私が見たのはセブンイレブンのサステイナブルな取り組みで廃棄になってしまう規格外の果物を使った商品の販売や、自社で作った野菜の使用などであったが、SDGs の取り組みがとても身近に感じ、地球に住み続けるには地球に対して優しい取り組みが今後必要になっていくと考え SDGs に興味を持った。SDGS を受講していく中で SDGs の 17 のゴールは私たちにとても身近でありこの先人間として生きていき沢山の人と共生していく上でとても必要不可欠であり目標達成のために個人個人が考えていく必要があると感じた。この講座では、環境問題やジェンダー、教育、町づくり、健康など私たちの身近にある問題からわたしたちがあまり知らない世界の状況までお深く知る事が出来ました。海洋プラスチック、米の品種改良や EU の石油などの資源、発展途上国の下水道処理など身近でありながら今まで深く学ぶ機会はなく、毎回専門の先生が授業をしてくださるので、この授業を履修しなければ知らなかったことが沢山あるのでとても新鮮で面白かったです。17 のゴールは一見離れているように思いますが、すべてつながっていて解決しようとする、色々なゴールを達成する第一歩となるが、反対に一つの事を解決しようとしても様々な分野が関連しているので解決するのが難しいことがわかりました。どのようなゴールでも達成することでどのような人でも生きやすい世の中になり多様性を理解することになるので社会全体で取り組んでいくべきだと思った。この授業では、実践講座ということで、問題を話し合い個人ができることや今ある制度を改めて考え直して問題を深く考え、発表を聞き新たな視点を発見することができた。

心に残った回は 3 回目の世界と日本の子どもの貧困について考えようの小野先生の講義で、日本は発展途上国よりも比較的豊かで、貧困の子どもがあまりいないように思えたが、実際は相対的貧困層が高く、15.4%でひとり親家庭がおもに相対的貧困であった。

また、世界では 6 人に 1 人の子どもが極度に貸しいと問題は深刻である。貧困問題が解決しないと、他の SDGs の目標も達成するのは困難だと言える。そのため貧困対策は社会全体で取り組んでいくべきだと思う。また、貧困から脱するのは難しく、世代で貧困が続いている場合や地域自体が貧困という事もあり自分を変える事ができないので、継続的な支援が必要になっていると学んだ。貧困の解決が SDGs の 1 番重要だと思うので支援の難しさを知った。この講座で身についたことは、物事を一つの方向から見るのではなく別の視点からも見てみることである。この授業を通して今までみることがなかった側面や考えたことがなかった考え方に触れた。例えば、東洋大学の男女雇用や日本の政策としてあるビニール袋の有料の効果は考えたことがなかったしできていると思っていた。取り組みをしていることが絶対ではなくその事が本当に良い影響を与えているのか疑いながら調べてみる事が大切だと知り今後取り入れていきたいと思った。また、物事の仕組みを考えてみるとい

う事も身についた事だと思う。海洋プラスチックやプラスチックを減らそうとレジ袋の有料化の実施も元々どのようなデータから問題視されているのかや、EUの石油の輸入などどのような仕組みで問題が起こっているのかまず問題になった経緯を知る事が解決を目指していく中で必要な事だと知りました。これからSDGSの課題や他の問題に取り組む中でどのような原理で過程があって問題になっているのか、先入観を持たずに持っている知識にだけ頼らないようにしっかり調べ理解していくことを学びました。今後活かしていきたい事として、必ずSDGsの取り組みに関わっていきたいとおもう。SDGsアンバサダーに参加し、既存のことではなく自分がしたいと思う取り組みを見つけ積極的に取り組んでいきたいと思う。また、今では大学だけでなく地元でも取り組まれているほど身近なので学んだことを活かされるように研究や、授業で考えた個人で出来ることを実行していきたいと思う。SDGsに興味を持ったきっかけは、廃棄物や環境保全であったが、17のゴールと様々な分野の目標がある。どれも本当に重要な課題であり解決していくことが望ましいとされている。SDGSも前の段階のMDGも現在では目標を達成できておらず、達成まで程遠い目標もある。すべてを達成するのは理想論かもしれないが、今よりも認知度を上げ世界中で取り組んでいく必要があると考える。秋学期全15回の授業だったが、SDGsの17のゴールに目を向け続け新しい知識を得ながらこの地球に住む人間として持続可能な開発になるように取り組んでいきたいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート⑧

全体の概要

SDGs 実践講座を受けて、私は 17 個のゴールの名前だけでなく、そのゴールに込められた思いや意味を学ぶことができました。各ゴールの名前を見るだけでは把握できない細かな目標や到達点を学ぶことで、考え出した案がどのような課題に対応するのかを対照するための良い判断材料になりました。この講座を受ける前はゴールの名前だけしか見ておらず、限られた狭い視野でしか課題の対応策を見ていなかったと思います。

心に残った授業回

心に残った授業は第 9 回に行われた北脇先生の授業です。この授業では水に関わる問題について扱っており、水質汚染による環境問題や健康被害について考えさせられるものでした。この授業を受けることで、事前に各 SDG は関わりがあると知識としては持っていたけれど、実際発生している問題やその原因、結果を知ることによって、実感として強く印象が残りました。例えば、海洋に広がっているマイクロプラスチックはどこから来るのかという問いに対して、答えは陸であるということに衝撃を受けました。はじめはまとまった場所で回収されていたとしても、雨や洪水、津波などによって川を渡り海にたどり着くと聞いて、人間の生活範囲から遠く離れた海につながることに印象が残っています。また、し尿や油などによる水質汚染も居住区から海に広がり、伝染病につながると学びました。はじめは水環境に関わる SDG6「安全な水とトイレを世界中に」や SDG14「海の豊かさを守ろう」だけを意識すればいいと思っていたけれど、思考を深めるうちに SDG3「すべての人に健康と福祉を」や SDG11「住み続けられるまちづくりを」、SDG13「気候変動に具体的な対策を」なども関わりそうなことに気が付きました。一つの問題が他の問題の発生・悪化につながっていると気付いた時、広い視野で物事を見て深く考え、様々な影響を予測することの大切さをこの授業から学びました。そして、はじめこそ海をきれいにする目的は海洋生物の生活環境を保護するためだと考えていたけれど、本当は何を目的としているのかについて考え直すきっかけとなりました。未だ答えは出ていないけれど、多方面に繋がりをもつ問題であることは自明であるため、持続可能な生活をするために対策を練ることがとにかく大事だとこの授業から学ぶことができました。

身に着いたこと

SDGs 実践講座はグループワークを軸とした授業だったと思います。そのため自発的な行動や協調性が何よりも重視されるように感じました。意見を出しやすいように和やかな雰囲気を保ったり、意見をためらわずにいったりすることが良いということを感じ取りました。もし自分の意見が的外れなものだったとしても、それが別の題材への材料になるかもしれないし、何より多様性という観点においてひとりひとりが違う意見をもつことは不思議で

ないため、周りの人の意見を聞くことはとても大事なことだと思いました。以前の私は発案が苦手によく自分の意見を言えないが多かったのですが、皆がどのような意見を持っているかを知るためにも自分の考えを共有しようという意欲を高められたと思います。また、「心に残った授業」の段落にも書いたように、多方面から一つの物事を考えたり、逆に一つの物事から多方面への影響を考えたりなど、広い視野で物事をみることができるようになったかと思います。グループワークを通して周りの人に感化され、自分の足りないスキルとよく向き合うことができたため、この授業の経験を糧によりよい行動がとれるよう改善をしたいと思いました。

これからどう活かすか

広い視野は SDGs の分野だけでなく普段の活動にも役立つと思います。一つの行動が多数の事象に影響を与えうることを踏まえておけば、社会問題においても環境問題においても改善策を練る中で役に立つと思います。また、今後ボランティア活動をする事があったとして、今までは第三者からの立場としてしか考えていなかったことを当事者目線になって考えることで、当事者にしかわからないような事象に気が付けるようにしたいです。また、それぞれの SDGs のゴールは家庭などの身近な生活環境が問題の原因であることが多いことが分かりました。このことから、生活するうえで目に触れる場所や行動は常に改めながら活動していきたいと感じました。例えば、水質汚染への影響を少しでも抑えるために油汚れのひどい食器は汚れをふき取ってから水で洗うことができます。食品ロス削減に関しては食べられる量だけしか買わない、頼まないことその他に、見た目は歪だけど味には全く問題がない食品の購入を優先するなど、各自で起こせる行動はしていきたいです。個人以外の活動として、もし今後 SDGs に関われる企業や団体に所属したら、様々な境遇の人とのコミュニケーションを通してさらに知見を深めたいです。そして、活動から得られた経験をもとに日本国内だけでなく世界各地の状況にも目を向けて、助け合いや努力をしていきたいと思いました。

SDGs 実践講座最終レポート⑨

今学期、SDG 実践講座をうけたのはとても良いことだと思った。僕にとって単位がもらえない授業ですが、もし2024の春学期この講座があったらもう一度取りたいと思っている。自分のSDG Action Plan も、日本語の学習も、友人づくりもとても大きなメリットがあった。特に日本語の学習にとっては、一番心に身に着けたことである。この講座に通じて、ほかの日本の学生さんアンバサダーと出会った。前は授業がいっぱいだったとか、時間が間に合っていないとかの原因で、日本人アンバサダーとの交流が少なかった。しかしこの講座のおかげでほかの日本人アンバサダーとの接触が沢山出来た。この講座のおかげで、今の僕たちの水グループでアンバサダーと協力し、学校のウォーターサーバーを新しいタイプかえてようっとを計画している、生徒たちにきれいな水を飲むこと、そしてペットボトルの数を減らすこと。マイボトルの使いを推進し、最終的にゼロペットボトルを目指す。このプランは今年僕自身に一番注目している計画である。こんなに素敵な活動を参加できるのきっかけはこのSDG 講座のグループ活動だった。もし僕たちの13、14グループ入れなかったなら、こんないい活動を出会えないだろう。

このSDG 実践講座の様々なスピーチの中、僕にとって一番印象に残るスピーチはやはり第七回の高田先生でした。高田健二さんのレクチャーは私に強いイメージを残されました。最高の授業はやはり娯楽で生徒に内容を伝えることです、高田さんはそれを完璧に貫いた。最初、うまい棒がもらった時、この授業はいつもの授業と違う感覚を感じた。いいな今日の授業、お菓子がもらえるんだ!!!しかも、授業のスタートは直接に授業を話すことじゃない、うまい棒の食べ方を教えた!前は全然知らなかった、いや、想像すらもできなかった、うまい棒は実は完璧に四等分に割れることができるんてこと。本当に楽しかった、僕のテンションも、学生皆のテンションも一気に盛り上がった感じ。それからレクチャーは、みんなは全員集中することができました。高田さんがJICAのメンバーのこと、そして彼が今SDGsを達成する上げた努力、今の仕事に捧ぐ精力、彼の経験談を全部僕たち生徒にかたりました。とても素晴らし講座でした、高田先生のレクチャー!!

この秋学期の全部学んだことは、簡単に言うと、日本語の練習と人と人の繋がり、あとはSDGに対してもっと深く感じたこと、様々な先生のレクチャーに通じて、彼らは全部SDGのこと、いや、未来のことをねつじょうをいたっている。熱情を込めて僕たち生徒にSDGのことを語っている。

やはりこれからの活動は、このSDG 講座に学んだ知識を全部使って、ほかのSDG アンバサダーと一緒に活動すること。SDG 目標たちに自分の理解方を理解し、ほかの生徒たちに伝えること。でも今の僕に対して、やっぱりウォーターサーバーのことを実行するのは最優先です。今手の近くにあることをなし解けるのは、これから僕がすべきこと。

SDGs 実践講座最終レポート⑩

私は、SDGs アンバサダーに所属していたため、この講座のことはアンバサダーでの周知で知りました。この講座を受けて、今までの自分の SDGs に関する思いと今後のことについて立ち止まって考えることができました。もともと高校生の頃から SDGs に興味があり、大学では SDGs について学びたいと思っていたのですが、自分の思っていた学部の学ぶ内容ではなく、大学で自分がやりたいと思っていたことができずにいました。そこで自ら SDGs に関する海外ボランティアスタディツアーに参加したり、海外の貧困層の子供たちのボランティアに参加したり、海外へフォーカスして個人で活動をしていました。そこで、今まで考えもしなかった、過酷な環境で生きている子供たちの現状を自分の目で見て初めて感じる感情があったりそこに生きる人の感情を自分の言葉で聞くことができたりしたことでもただ自分がいるだけではだめだという風に思いました。それに対して、「過酷な状況に生きる子供たち」イコール「かわいそうな子たち」という固定概念を持ってしまっていたこと自体間違っているなということも感じました。実際に現地へ行くと子供たちはとても元気で楽しくてエネルギーやパッションがあって幸せや喜びを私たちが与えるどころか、逆に自分たちが子どもたちから笑顔や元気をもらっていました。SDGs という世界的に見てもとても大規模で、かつ抽象的でもある、どこまで行けば「達成」と言えるのか曖昧ともいえるこの事柄について私たちがフォーカスしていく流れにおいて、まずは固定概念を覆すことがかなり重要になってくると私は感じました。そのうえで、聞いた話や噂話、情報源のわからない不特定な噂や情報などを信じたり疑ったりするのではなく、じぶんがフォーカスしていく内容に関して、実際に自分の目で見て正しい情報を知ることの重要性を強く感じます。自分の目で見て、自分の心で「今の私に何ができるのだろうか」という感情に至ったとき、今すべき行動が明確に定まってくるのだろうと思います。私が一番心に響いた授業は「第五回、移民・難民と私たち：共生社会へのカギ」南野先生の講義で、私が考えていたように、貧困や難民についての固定観念はやっぱりあって、でもその人たちをただ「かわいそう」と思うのではなくて、ワークを通じて自分だったらどうするかというようなその人の立場になって考える授業にとっても心を惹かれたのを覚えています。ただ単に「固定観念を捨てよう」ではなく自発的にその立場の人たちの感情を考えることができたため、このワークはとても大事であるという風に感じました。前述したように、実際、私は外国の貧困層の子供たちと今までで変わってきて、この講義を受ける前までは「1. 貧困をなくそう」にフォーカスして学びたいと考えていました。もちろん、貧困のことについて学ぶことができたのですが、それだけでなく、様々な立場の教授や先生がいらっしゃって様々な方面からのお話を聞いたこともあり、自分の興味のある分野が少しずつ増えていったように感じました。貧困や難民などの「SDGs NO.1」や「SDGs NO.10」についての興味をより持つことができたうえ、最終的に私がフォーカスしたのは「SDGs NO.12 つくる責任、つかう責任」でした。今の自分に何ができるか、を考えたときにバイト先での食品ロスであったり過剰廃棄、また

小さいけれどゴミの削減などが一番身近に取り組める内容だと思いました。私たちのグループでは一番身近な学食に対する食品ロスにフォーカスしましたが、これらをじっさいにとりくむことが実現すれば、東洋大学におけるゴミの削減をはるかに抑えられるのではないかと思います、私が働いているバイト先でも、閉店時間に近づいてきたタイミングでフードロス削減のため割引で提供したり店内利用のお客様にはマグカップやグラスでの提供を促進したり、企業側から積極的なアクションを起こしているように思いました。これらを通して、SDGsに関わるような、企業の環境に対する開発部などはどうだろう、自分に向いている職業って何だろう、と少しずつ考えるようになりました。ひとりひとりが少しずつ、意識して変えていく継続的なちからの大きさを知れただけでなく、企業側がアクションを起こす事の重大さを強く感じました。どのようなアクションを起こせば未来の持続可能な社会へとつなげていけるような国をつくっていけるのかということに小由美がありそのような食につなげていければいいかな、というように規模は大きいかもしれないのですが、ただ「SDGsに興味がある」と始めたこの講座の自分と比べて少し前に進めたように感じます。この授業で得た様々な視点からの多くの知識を踏まえ、自分に合った職へ向かっていけるように今から企業を探したりインターンに参加したり行動に移していきたいと思いました。

SDGs 実践講座最終レポート①

総合ⅢB／全学総合Jは毎回違う講師の方から、SDGsについて、実践的かつ現実的な話をお聞きし、グループ内のディスカッション等で、更に自分の思考を深めることで、SDGsを「自分ごと」として認識することを目的とした講義だ。実践的というのは、実際に講師の先生が自分自身の研究分野とSDGsを結び付け、そこからどんなことを行っているのかといった、フィード上で取り組んでいる活動や研究を指す。また、現実的というのは、講師の先生が経験したことがベースになり、その場に行かなければ知りえない課題等を講義していただいている点のことを指している。

私は、第13回水村先生の「スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境」という講義が特に印象に残っている。理由は、私がこの講座を受講するきっかけとなった「ひとり親問題の解決」に貢献できる可能性がある内容だと考えたからだ。私は、母子家庭で育った経験から、ひとり親を取り巻く様々な問題に興味がある。この講義内であげられたスウェーデンのコレクティブハウスは協働性の高い生活形態の中で、電力削減や、フードロス等のSDGs的な意義のある取り組みとして取り上げられた。現在のスウェーデンでは、高齢化に伴い高齢者の居場所作りの一環としてコレクティブハウスを住宅政策の一つとして採用している。互いに様々な人々が助け合い、見守り合うという手法を取ることで、講義内の資料には「自分自身が、ある役割に属しているという感覚が得られると同時に、自分の能力に応じた貢献を果たしているという実感が得られる」という。また、様々な施設を一つの場所に集約することで、子どもたちの安全面や利便性だけではなく、親にとっても食事を作ることや子供を保育園幼稚園等から迎えに行く手間等の「時間的」負担が軽減される。現在の日本などの政策は資金面控除があっても、時間の控除をすることは難しい。そんな中で、このコレクティブハウスは社会的弱者救済を目指す際に、大きな役割を担えるのではないかと考察する。水村先生は、第13回のミニレポート振り返りの返信の中で、「空き家を活動しながら、地域の中にコレクティブ活動を展開する住宅を供給する事業も開始しています。この試みは日本の空家対策にも有効なのではないかと考えています。」と、記述している。日本では、文化や国民性の観点で、コレクティブハウスの導入は難しいのではないかという意見がディスカッション発表の際に多く上がっていたが、私はこの取り組みを取り入れられる日本社会になれば、今よりもっとお互いを助け合い、課題共有の中で問題解決を目指す国民が生まれるのではないかと考察する。

また、この講義ではグループ発表のために、受講時間外にも多くの学びを得ることができた。私はグループ3・4の「すべての人に健康と福祉を」と「質の高い教育をみんなに」という目標を目指すメンバーとグループを組んだ。しかし、この目標では枠が広すぎることから、それぞれの興味関心や問題意識が異なり、どのようなお題で、どのような行動を起こそうかということが大きな論点となった。また、板倉キャンパスと白山キャンパスの2キャンパスから参加していた為、リモートによる話し合いが主になり、話し合いを進めづらいも

どかしさがあった。しかし、このように根本的などのようなお題を深めるのかについて話し合ったことで、SDGsをより身近で、なおかつ身の回りの小さなことから解決することができる課題なのではないかと考える力を身に付けることができた。また、グループ活動を行う中で、ファシリテーション能力やグループ内での立ち回り方、そして実践までつなげる過程や問題等に向き合う力を身に付けることができた。この学びは、他の授業では経験できない、総合ⅢB／全学総合Jだからこそその学びだったのではないかと考察する。

私はこの講義や、グループ学習を通して、今後挑戦してみたいことが二つある。第一に、自分の興味関心のある、ひとり親を取り巻く諸問題について自分がアクションを起こすことだ。その第一歩として、講義の中で問題意識として挙げたことや、実践できることを、自分が所属するコミュニティに普及していこうと考えている。その際、この講義で学んだ知識や経験を十分に生かしていこうと考えている。第二に、学校内でSDGsアクションを起こすことだ。私はこの講義内のグループ発表を通して、災害情報が学生や職員に行き届いていないことで、災害発生時にパニックが起こってしまうのではないかと、という問題意識を持った。この問題を解決するために、学校内のTOYOアプリを活用のほか、ポスター掲示の改善等を行うことで、より学生が災害時に混乱せず、落ち着いて行動できる環境作りを行おうと動き出している。このように、普段は考えたこともない問題を、この講義を通して行動に移すところまで実践することができた。この経験をもとに、普段の生活でも常に問題意識を持ち、もしものことや、これはどうなっているのだろうという疑問を持ち続けることで、持続可能な社会を実現する一個人として、できることを実践していきたいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート⑫

私はこの SDGs 実践講座を受講して、SDGs の 17 の目標とそこにある細かな目標、その達成を阻害する問題や、それを学術的・技術的な観点から分析・改善しようとしている人や組織の存在を知ることができた。また最終発表では、持っているリソースを最大限活用することによって自身で考えた独創的かつ個性的なアクションに取り組んでいるグループがあり、実施するのが不可能だろうだと思っていた自分の固定観念が壊され、大きな刺激を貰った。

私が心に残った授業回は、第 5 回目の授業である南野先生の「移民・難民と私たち:共生社会へのカギ」である。この回は、人がなぜ移動するのか、難民とは何なのかについて説明を受けた後、難民はどこで生まれるのか、各国の難民事情の具体例を見て、「もしも自分自身が難民になったら？」というテーマでワークショップを行った。難民の具体例として最も印象に残ったのはシリア難民についてである。ここでは民主化による内戦や宗教対立、過激派組織の介入など様々な問題が複雑に入り組んでいるような地帯であり、それから逃れるため多くの人々が船で地中海を經由して欧州に移動しているが、その途中で命を落とす者も少なくない。私は講義で、欧州に向かう途中で命を落としたアラン・クルディ君の死体の写真を見て、「どうしてこの少年が自分とは全く関係ない内戦や対立によって理不尽に人生の歯車やキャリア形成が狂わされ、拳銃の果てには命を落とさなくてはならないのか」と思った。しかし、前述したとおり、この地域の問題の根本的な解決は我々一般人には難しい。そのため、まずは知り合いなど他の人に知ってもらう必要があるように感じた。

また、「もしも自分自身が難民になったら？」というテーマで行われたワークショップでは、「国内の政情不安により 2 日後に家を出て隣国に行くことになったので、知人とは当面連絡を取れないこと、スマホのデータを 9 割消すこと、身元が分かるものはすべて捨てること、荷物はスーツケースとリュック以外はすべて置いていくことを厳守せよ」という条件下で、何を持っていき何を捨てるのかをまとめて付箋に書くというものだった。

私は持っていくものとして「親」「スマホ」「お金」を選び、捨てていくものとして「友達」「クレジットカードやキャッシュカードなどの身元が特定されてしまうもの」「家」を選んだ。捨てていくものを書いた付箋はくしゃくしゃにしてゴミ箱に捨てたので、もう取り戻すこともなければ元通りになることもないのだと実感した。このワークショップを通じて、「難民の人たちもこのように自分の大切なもの、持っていけるものを選別して、持っていけないもののお別れを経験したのだな」と思い心が痛くなった。

この講座を受講して身についたことは、様々な事象に対して、より多くの SDG を関連付けることができるようになったことである。例えば、私は上記の難民のワークショップを終えて、あのようなつらい選択は、自分の住んでいる街・故郷に住めなくなることを意味しているため、この授業で取り上げられた SDG10「人や国の不平等をなくそう」や SDG16「平和と公平をすべての人に」以外にも私の関心の持っている SDG11「住み続けられるまちづく

りを」にも関わっているのではないかと思った。実際に、難民ではないが、日本でも地震や水害に逢う毎に、故郷や友人との仲を捨てて違い場所に移り住むのか、今後も同じような災害が起こるリスクを承知で今の家や友人と同じところに住み続けるのかという選択を迫られるケースをよく目にする。日本に住んでいる以上、どのような形であれどこに住んでいたとしても被災するリスクは 0 にはできないので、一般的に戦争などが起きず平和とされている日本に住んでいる我々でも上記のワークショップのような出来事に遭遇するかもしれないということを認識すべきであると思った。

また、今回最終プレゼンで話した通り、SDG11「住み続けられるまちづくりを」の「まちづくり」と聞くと、行政や政府など個人で関わるのが難しいものが多いイメージがあるが、やり方次第で個人でも「まちづくり」に関わることができ、またその関わり方も地域の魅力の SNS 発信からオンブズマン制度まで、様々な形があることを改めて実感することができた。

これからどのように活かすかについて、個人としては、旅行が趣味なのでその旅行先の魅力を伝えることでより多くの人にその魅力を知ってもらい、それらの遺産を未来に残し続けるほか、もうすぐ自分の街で市議会議員選挙があるので、だれに投票するかをじっくりと考えたうえで投票しに行こうと思った。SDGs アンバサダーとしては、その立ち位置をフル活用して、防災クイズラリーなどのイベントを設けたり、東洋大姫路高校との連携活動を成功させて地域の資源を有効活用したりすることによって、SDG11「住み続けられるまちづくりを」の達成に貢献していきたいと思う。

SDGs 実践講座最終レポート⑬

SDGs の授業全体の概要

今学期の:講義を受けて感じたことはどの SDGs の課題解決に対して議論する際にも各国、各地域の歴史的背景を調べ、議論せなければならないということが分かるような内容の授業でした。

心に残った授業回 第三回

この講義では、パキスタンの貧困の子供の実情を伝えられ、彼らと私達の想像する貧困の子供たちのイメージにすごく乖離があるということが分かりました。

具体的には、私達は学校に行かずに働かなければならない→「勉強する機会が得られず、読み書き、簡単な四則演算ができず将来大変な思いをする子がいるのだろう。」

という貧困の子供たちのイメージでしたが、実際には「路上でゴミを拾って回収したり、コロナ期間中にはマスクを路上で売るなどして現地で自ら得た情報を基にして生き残っている子供たちは本当に賢くて、そのような機転が利かない子供達は生きていけない。」という内容の話を講師の方がして頂き貧困の基準とは?ということをとっても考えさせられる授業回になりました。

ミーティングの際に相手の意見に対して、どういったリアクションをするかを考えずに出来るようになりました。* 1

また、チームでプロジェクトでやる際に自分が仕事を全て全うすることができない際には直ぐに連絡して、他の人をお願いして迷惑を掛けない様に頼む勇気を得られた事とそのことの大切さに気付くことができました。

この事に気づいたきっかけは別のコミュニティで以前プロジェクトを進める際には僕だけが学部二年生で他のメンバーは学部一年生だったので、リーダーを決めたわけではなくですが、自分が中心に進捗報告をして欲しいと促しましたが、発表締め切りの 3 日前になっても連絡がこないことがあり発表当日の午前 2:00 までパワーポイントをまとめるようなことがありとても大変な思いをしました。

ですが、今回は上級生、プレゼンに慣れている人が多く自分が今度はアイデアはたくさん出していましたが、モチベーションがあまり他のメンバーよりも高くなかったです。しかし、チームとして4つほど実行したい具体案がありました。対局的に自分は4つの中から一つの計画を実行出来れば良いと思っていました。なので、具体的な資料作成は他のメンバーにお願いした比重が高くなりました。* 2

そして、グループ内で会議をする際には話が進まなくなってきた際には雑談を上手く利用して、アイデアを出すきっかけを作り、概念の再試行を促すことのきっかけづくりをするこ

とが出来ました。

例えば、社会にとって+になることを増やして、-になることを減らせる具体策があったら、ベストでした。そんな話のきっかけはメンバーの一人が高校時代にその様なプロジェクトを経験していたという内容の雑談でした。しかし、その様な理想的なアイデアを考え、計画を建てるには1ヶ月以上かかるよと言われました。しかし、-をなくす事=+を増やすことでもあります。という発想が出来て、シンプルにアイデアを多く出す事に繋げる事が出来ました。*3

また、この講義を通じて会議をする場所、授業を受ける場所をスケジュールに加えて内容も考慮して、選ばなければいけないと思いました。

具体的には

発表しなければならない授業を受ける際には、どんなに忙しくても、ファミレスなどの騒音がうるさいところでは他のメンバーのノイズにいってしまうため自分の家か、学校で授業を受けなければいけないと感じました。*4

以上の4つの事がこの授業を通じて身に付きました。

身に着いたこと*1について・これから学生時代を終えて社会人になった後でも、アクションやリアクションに対して自分もさらに良いリアクションを返していき、会議の雰囲気作りを周りと協調して上手くやっていける大人になりたいと思いました。

身についたこと*2について・これからもプロジェクトに積極的に参加するために自分は無理をせず人に頼る術を身につけるとともに、人に応援されるような行動を普段から心掛けていきたいと思いました。また自分がメンバーを引っぱっていく流れになった際には他のメンバーが仕事を助けてください。と言える雰囲気を作ると共に自分がスプレッドシート、ドキュメント、パワーポイントなどを上手く、素早く活用できるようなスキルを身につけたいと思いました。

身についたこと*3について・これから会議をする際にも解決策がうまく出てこなかった時には雑談の引き出しを会話の中から探しながら、見つかり次第自然な流れで雑談をして、その中でも課題は頭の片隅に置いておき解決策を見出す流れを務める努力がしたいと思いました。

身についたこと*4について・ミーティングをする際にもミーティングをする場所をスケジュール、内容を考慮した上で使う器具、場所を選ぶということはこれから私たちが卒業研究などをする際にも必要な実験器具、安全な場所、試料の保管している環境を整える事と同じ様な目的から逆算する考え方だと思うので楽しみながら慣れていきたいと思いました。

SDGs 実践講座最終レポート⑭

【始めに】

元々が大学外で既にボランティア活動等に取り組んでいましたので、大学内で何かしらのアクションに取り組む予定ではありませんでした。しかし、夏休み期間中に SDGs 実践講座という授業があるということを知って、内容を調べてみたところ、更に SDGs に関する理解を深め、今後の活動に繋げることが出来ると考えたため、参加することにしました。

【印象に残った授業】

この講座で印象に残った授業は第 11 回の海洋プラスチックを考えると第 12 回のセキュリティ再考です。第 11 回が印象に残った理由は自分の加わっているグループのテーマである作る責任、使う責任と強く結びつく内容であったため、議論が白熱したのと、今後のアクションプランにつながりのある内容が含まれていたからです。また、水筒やカラトリーの持参等の普段自分自身で取り組んでいることとのつながりが大きいからです。第 12 回が印象に残った理由はドイツが環境先進国だと思っていたため、第二外国語の授業でドイツ語の授業を選択していたため、石炭や石油等の化石燃料の使用が多いことにショックを受けたからです。このことから、イメージで考えるのではなく、正しい情報を調べた上で判断するということが大切なことを学びました。またウクライナへの軍事侵攻が特にエネルギーの観点から更なる格差が広がるのではと心配になり、戦争について調べたことがあるからこそ、自分が出来ることをしなければならぬと考えさせられました。

【身についたこと】

先入観やイメージで考えるのではなく、実態を知ったうえで考えるということが大切なことを学びました。先ほど書いたドイツのエネルギーの実態のように、先入観やイメージと実態が異なるということはあるので、ただやみくもに行動するのではなく、これからは実態を知った上で行動しようと考えようになりました。また、みんなで協力して取り組むことの大切さについても学ぶことが出来ました。今までは何かのアクションに取り組もうとする際に、一人で抱え込んでしまうことが多かったのですが、この講座に参加してからは、得意分野を生かしながら、他の人とも協力することで、効率よく取り組むようになりました。授業の期間だけでは時間が短くて、アクションを起こすのは難しいと思っていましたが、協力し合ったとことで、今すぐにもアクションを起こすことが可能なところの直前まで進めることが出来ました。SDGs の目標の期限は 2030 年までであり、残された期間はあまり多くはありません。しかし、多くの人々が協力し合うことで、短い期間であっても出来ることがあることを学びました。また、一人一人の力は無力ではないことを実感させられました。SDGs の目標を今から達成するには協力しかないと思いました。17 の目標の中でも特にパートナーシップで目標を達成しようという目標こそが全ての目標の成功の鍵を握っていると考えました。これこそが SDGs におけるパートナーシップで取り組むことの大切さなのではと考えました。

【これからどう生かすか】

1つ目にアクションを行う上での心構えです。現在この講座で出会ったメンバーと食堂のゴミを削減する取り組みと食品ロスを削減する取り組みを進めています。この講座を通して、それぞれのSDGsの目標は密接に結びついていることを知ることが出来たので、一つの目標に縛られるのではなく、広い視点で考えて取り組みたいと思いました。また、協力して取り組むことの大切さを実感することができたので、今回取り上げたアクションに限らず、何かしらのアクションに取り組む際には、それぞれが得意なことを生かしながら協力して行いたいと思いました。

2つめに大学での学びについてです。自分はまだ1年生であるため、まだまだ大学で学ぶことはたくさんあります。自分の学科の授業では直接的に持続可能な取り組みについて学ぶ機会はあまりないのですが、今回の授業を通してあらゆる分野が持続可能性に結びついているということを知ることが出来たので、今学んでいることがどの様に持続可能性に結びついているのか考えながら学ぼうと思いました。

3つ目に就職活動についてです。自分はまだ1年生であるが、就職について調べ始めています。持続可能な取り組みは慈善活動的なイメージが強く、企業が取り組むものという発想があまりなかった。しかし、調べていく中で、最近は持続可能な取り組みを行う企業がふえており、持続可能な取り組みをしている企業に就職したい人向けの就活サイトがあることを知りました。そのため、持続可能な取り組みに挑戦できるのかという観点も踏まえながらこれから本格化する就活に備えたいです。

【感想】

既に様々な活動に取り組んでいて、ある程度知識があったので、今更に参加する意味があるのだどうかと申し込んだときは疑問に思っていました。しかし、参加してみても有意義な内容でした。また、新たな出会いがあり、一緒に活動していきたいと思いました。

SDGs 実践講座最終レポート⑮

はじめに、全体の概要としては、SDGsのそれぞれのゴールを達成するために、専門分野の先生から基本から応用までの知識や方法を教わり、時々グループワークをして小さなアクションを起こしてみるといった実践的な学びを行った。後半では、事前に分かれたグループでそれぞれテーマを設定し、どのようにアクションをしていくかを考え、第15回のプレゼンテーションで共有を行った。

次に、私が心に残った授業回は、第8回の「対話的な深い学びへのアプローチ」の授業だ。なぜこの回を選んだのかというと、議論というのはどの目標においても関わり、また自分の学生生活の中でも活用できると思い、「自分ごと」として学ぶことができているからだと思う。よくあるディスカッションが説明されていた時に、私はこのよくあるディスカッションの経験を思い出して、よりよいディスカッションの方法を求めている自分がいることに気づいていた。例えば、自分は具体的で分かりやすい話の内容を素早く組み立てることが得意ではなく、その分かりにくい意見を聞いた人が議論についていけなくなって参加できていなかったり、声の大きい人の意見を聞いて、自分の意見を言うことに躊躇い、結局納得していないまま議論が進んでいってしまったりと、ディスカッションでの集団浅慮に陥っていたと思われる経験を思い出していた。そういったよくあるディスカッションから、効果的な話し合いを目指したアクションラーニング形式の話し合いという方法をその回の授業で知り、この形式が自分のもやもやしていたディスカッションを変える方法だと感じた。アクションラーニングは、質問中心ですすめて、振り返りの時間をとるといった仕組みであるが、授業内で行ったグループワークでは良い質問をすることに慣れておらず、アクションラーニング形式で話し合いをすることが上手くできなかったように思う。また、問題提示者という役割が、よくあるディスカッションでは存在しないので、その役割が上手く立てられず、そのままディスカッションが進行してしまったように思う。アクションラーニング形式の話し合いは意識的に取り入れなければ、経験上慣れてしまっているよくあるディスカッションに戻ってしまうことがあるため、何度も立ち返っていく必要があると感じた。加えて、セッション規範を立てる方法は、何度か他のグループワークでも見たことがあったが、どのような機能があるのか学ぶ機会はなかったため、経験と結びつけて新たな発見が得られて良かった。以上のことから、第8回の授業が心に残っている。

そして、身に着いたことは、SDGsを「自分ごと」として捉えていく力だと思う。「自分ごと」として捉えていく力とは、SDGsの目標を他人事のように考えるのではなく、自分だったらどう思うか考えたり、自分のことのように行動していったりするための意識のことをいう。例えば、私は第5回の難民問題の授業を受ける前は自分自身が難民になったことがなかったり、難民の人と会話をしたことがなかったりして、身近な問題ではなく、どこか遠くの話のように考えていたけれども、自分の大切なものを紙に書きだし、その書き出したものを取捨選択して紙をくしゃくしゃにするワークで、自分の大切なものを失うことの辛さ

というものを感ずることができた。また、難民に向けられた様々な目線を考えてみることで、難民の人が置かれている現状を自分も擬似体験することが少しでもできたように感じた。そういった難民の人が感ずている辛さというものをそのまま感ず取することは不可能ではあるけれども、その辛さを自分に置き換えて理解すると、「自分ごと」として捉えられることができるようになったと思う。そういった問題によって苦しめられている存在の「痛み」を自分のことのように理解することは他の SDGs の目標でも同じようにいえると考える。そうして「自分ごと」として捉えることができると、学ぶことに積極的になり、リーダーシップを発揮できるようになることも感じた。このことから、身に着いたことは SDGs を「自分ごと」として捉えていく力だと思う。

最後に、アクションラーニング形式の話し合いや、「自分ごと」として捉えていく力といった SDGs 実践講座で学んだことや身に着いたことを、これからは SDGs アンバサダーやボランティアで活かしていきたいと思った。SDGs アンバサダーでは、SDGs 実践講座で学んだことを活かして、アクションプランをチームで協力して考えていきたいと思う。そうして「自分ごと」になった SDGs の目標と向き合っていきたい。また、ボランティアでは、自分があまり興味を持っていなかったところにあえて飛び込んでいって、「自分ごと」として捉えていけるか挑戦していきたいと思う。ボランティアは、社会課題を解決するために、身をもって貢献することができる機会である。たとえ最初は興味がなかったとしても様々な人と話したり、色々なものを見たり聞いたりして「自分ごと」として捉えていくことで、自分の中の引き出しを増やすことができるのではないかと思う。そのため、ボランティアでは様々なことに関心を持って参加していきたいと思った。

SDGs 実践講座最終レポート⑩

1.全体の概要

まず全体の概要はSDGsの17の目標に沿うかたちで授業が展開されていました。

1回目はオリエンテーションや本講義の具体的な目的として学生を含むすべてのステークホルダーがSDGsを知り、一人一人が「自分ゴト」として捉え、目標達成のための行動へと昇華させることを目指すことが設定されていることを学びました。

2回目は「世界がもし100人の村だったら EDITION 2008 If the world were a village of 100 people」の内容を踏まえて3回のグループワークを通じてSDGsへの意見や理解を深めました。

3回目はSDGsターゲット1について説明を受け、絶対的貧困と相対的貧困の違いについて学び、それらをうけて世界と日本の子どもの貧困の現状や対策についての自分なりの考えを持つことができました。

4回目はSDGsに関連してトレードオフの関係について学び、カーボンニュートラルや脱炭素社会に向けて3万人の学生や大学組織で実施すべきことのアイディアをグループワークで出し合ってまとめました。

5回目は「移民・難民と私たち:共生社会へのカギ」として移民や難民の現状を知り、付箋を用いてワークをしました。そして難民側と受け入れ側で分かれて当事者として考えるグループワークをしました。

6回目は「見える飢餓と見えない飢餓 ー植物科学からの挑戦ー」としてhidden hungerを改善するためにできる解決策とその問題点を話し合いました。

7回目は座学的にSDGsの17の目標を学ぶというよりもグループワークやうまい棒を用いて実際に経験して物事の見方、考え方を学びました。

8回目は「対話的な深い学びへのアプローチ」として自己紹介ワークやグループセッションをし、「自分の関心」を、「グループの課題」として共有し、「社会の課題」につなげる。さらに解決にむけた一歩を踏み出す力を育むことができました。これまでの授業内容を振り返りつつ、対話的なディスカッションを通して、SDGs17ゴールの問題・課題への取り組み方を考えることが出来ました。

9回目はSDGsの目標を踏まえて、社会の環境や健康について学びました。また、SDGsの成功要因を知り、日本のSDGsの実現に向けた動きを各機関別に学びました。

10回目は雇用労働におけるジェンダー平等として「女性活躍推進企業データベース」を用いてグループワークで各学校法人の情報公表状況を見て特徴を捉えて、分析しました。

11回目は海洋プラスチック問題を何が問題なのかを学び、その対処の仕方を考えグループディスカッションをしました。そして講義と自分のグループのディスカッション、他のグループの発表を通じて、海洋プラスチック問題に対応するための方策について、個人として

の提案を考えました。

12 回目は「Security を再考する」をテーマとしてウクライナ戦争と EU 気候変動・エネルギー政策について学びました。そして次の世代を担う若者として、日本はどのようにロシアに立ち向かうべきか。どのようにエネルギー安全保障の問題にアプローチすべきか考えました。

13 回目は「スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境」について SDGs の 11 の目標「住み続けられるまちづくりを」を踏まえて学びました。

14 回目は「未来の仕事 働きがいと新しいテクノロジーから考える」としてワークエンゲージメントを社会的技術的な観点から学び、考えました。

15 回目は授業外でミーティングを行い、意見を出し合ってスライドを作成し、発表しました。他のグループの発表を聴くことでより深く目標について理解できました。

2.最も心に残った回

この 15 回の授業の中で最も心に残った回は 13 回目の「スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境」です。

私は板倉キャンパスで食環境科学部に所属しているため、興味深く講義を受け、自分の学んできたことを活かして積極的に話し合いに参加することが出来ました。また初めて耳にしたコレクティブハウスに興味を持ち、共食の大切さを改めて実感することができました。農林水産省の第 4 次食育推進基本計画にも、「国民が健康で心豊かな生活を送るためには、健全な食生活を日々実践し、おいしく楽しく食べることやそれを支える社会や環境を持続可能なものにしていくことが重要である」とあることからコレクティブハウスでの共食は日本で普及すれば、食べ残し等の観点からも環境に良いのではないかと考えました。厚生労働省も今日の健康ばかりでなく、明日の健康を考えていくところに「休養」の意義付けをしており、単に 1 日中寝転んで過ごすのではなく、趣味やボランティア活動などで週休を積極的に過ごすこと、長い休暇で、家族の関係や心身を調整し、将来への準備をすることなどが真の休養につながるとしています。日本は 1529 万 2 千世帯と全世帯の約 3 分の 1 弱が単独世帯なのでそのことから家族がいなくても他人と関わることになるという点で心身の健康にも良いのではないかと考えました。

以上のことから講義内でお話があったように私も高齢者でも単に介護食として毎日食事が勝手に出てくるよりも施設内で自分たちで作る活動をした方が長く健康的でいられると思いました。また、私は管理栄養士を目指してこの大学に入ったので一番自分ごとのようにこの授業の内容を考えることができました。

3.身についたこと、これからどう活かすか

身についていたことはあまり自分の意見を持つことが苦手でしたが、各回のほとんどに話し合いの機会が設けられていたため、自分の意見を発言することが出来るようになりました。トラブルや欠席することもなく出席し参加できたのもよかったですと思います。

また、グループ内の他の人の意見にも耳を傾け、意見を受けてさらに発言できるようになりました。同じ板倉キャンパスの人はいなかったため、知らない人と交流を深めることも出来ました。そしてこの授業を通して他のキャンパスの SDGs アンバサダーのリーダーの方と一緒にオンライン上ではありますが、活動をする事が出来ました。この授業で縁がなかったらその活動に参加することはなかったと思います。

そして、自分の興味のある SDGs の目標である『12 つくる責任つかう責任』だけではなくそれに関連した目標やあるいは違う目標に関連した授業を受けたことで知見を得ることができました。それだけではなくそれらの目標を踏まえてどういった活動が重要なのか考え、行動することが出来ました。授業を受けるまでは SDGs アンバサダーとして在籍しているのにも関わらず、具体的な活動や目標を踏まえた企画に積極的に参加することは出来ていませんでした。私は 4 年生になって初めて SDGs アンバサダーの存在を知り、そして東洋大学のキャンパス合同でこの講義があることを SDGs アンバサダーになってから知りました。

富士樹海清掃の際も自ら教授に提案、資料を作成し、ボランティアを募集していることを周知するとともに SDGs アンバサダーの存在も伝えることが出来ました。しかし、これらの活動は決して 1 人では成し遂げることは出来なかったと強く思います。SDGs の目標の達成には誰かひとりが頑張るのではなく、この授業のように協力して誰ひとり取り残さずみなが成し遂げることが大切だと感じました。

それらを踏まえて今後は社会人になるので、学生とは違うアプローチで授業の内容を活かしていけるとと思います。具体的には活動に参加するだけでなく、活動を企画をするなど、企業でのより大人数を巻き込んだ取り組みができます。さらにそこで得られた結果をもとにさらなる改善に繋げ、SDGs に興味がない人に活動を学生時代よりもさらに周知し、行動を促すことができると思います。

SDGs 実践講座最終レポート⑰

期末レポート

約 15 回の授業を通して改めて SDGs というものの、一つ一つの概要をつかむことが出来たと思います。この目標は僕ら Z 世代が特にこれから生きていくうえで重要になってくるものだと思うのでしっかり取り組んでいきたいです。全体の概要は各授業ごとに SDGs の各項目を詳しくレクチャーしてくれ、それを下にグループワーク、ディスカッションを進めていきました。感想を約 400 字書くことで授業の振り返りを濃くできたと感じています。心に残った授業というのはたくさんあります。だけど強いてあげるなら、第 8 回の堀本先生です。グループが分けられた最初の授業であったので当初とても緊張したのを覚えています。ここでは SDGs の内容よりも、人との関わり方、自己開示の仕方を学ぶことが出来ました。自分が自己紹介をしてからメンバーの皆から質問攻めにあってそれがある意味新鮮であったかもしれません。自分を知らうとしてくれる、自分が聞く側の立場の時は傾聴力を大事にして今度は自分を何度もする。この過程があったからこそグループのメンバーとはすぐに打ち解けられた気がします。これは大学の授業だけでなく他のことにも活かそう！と考えました。社会人になってから、新しく出会う人との自己紹介など、多岐にわたる場面でぜひ使ってみようと思います。またこのワークを通して一人で物事を進めるのは難しいなど。自分だけが満足しないで周り目線を合わせながらやること、その重要さにも気づけたからこそ一番印象に残った授業になったのではないかと考えます。

SDGs の観点で書くと環境問題、貧困問題には驚きの連続でした、カーボンニュートラルの取り組み、学生自身が出来ることは何かであったり、就職を進めていく上でこのようなことに取り組んでいる企業に改めて興味を持ちました。貧困に関して、自分は国際学部所属なのですが先進国の貧困問題にも触れることが多いです。日本でも貧困で食料問題に苦しんでいる人もいるしどの国でも必ずいると再確認できました。フードバンクや子供食堂があるけどそれに代わる大きな政策、方法に探して貢献できるようにしたいです。環境問題はカーボンニュートラルをはじめとして興味を持ち今年の秋スウェーデンに交換留学が決まったのでより学びを深めたいと考えています。

身についたことは主に三つあります。一つ目は自分が興味のない分野でもベーシックとして知識がつけられたことです。それによって多角的に以前より世界の状況や会社の取り組みの理解を深めやすくなったと思います。二つ目は授業を通して行動としての振る舞いも変化したと深く感じています。というのもグループワークをする度に自分が最年長のポジションであることが多かったのでリーダーとしての振る舞いをするのが多かったのではないかと勝手に思っています。中々経験出来ることではないのでたくさんやれたことは本当に良かったです。自分だけが満足せずに周りを見ながら空気を作る能力というのはこれからもとても大事になってくると思うので授業で学んだことを無駄にしないように注力し

ます。最後の三つ目は自分の将来の軸の形成が明確になったことです。授業を受ける前の自分というのは、SDGs に対して関心は少なからずあったけど一部のことしか知りませんでした。授業を通して指標の役割、それが為す意味など全体を見渡せたことで自分は将来のこのようなことをやりたいと今は明確なビジョンを持っています。以上ここでは書くのが収まらないくらい身に付きました。この授業を取っていなかったら今ほど全体の知識だけでなく関心すらも生まれなかったのが本当に履修して心の底から良かったと思っています。

学んだことをどう活かしていくか、まず一つ目は上記にも書かせていただいた通り私は年の秋にスウェーデンに留学することが決まりました。この国は環境問題、今習っているSDGs に関する取り組みに力を入れています。先進国の活動、学生の意識、彼らとこのテーマについてディスカッションを重ねることで、習った知識を活かすことが出来たらいいなと思っています。この国独自の取り組みを間近で見ると日本に還元できることはないか探すのも大きな目標です。留学生活を無駄にしないように英語もより一層鍛え上げて目標を乗り越えます。そして充実した大学生活になるようにラストスパートを切り抜けます。二つ目は就職した先でも世界の環境問題、貧困問題に携わる職業に就きたいです。どの会社も誰かのために働いているのが当たり前だけどこの授業で関心を持ったからこの軸というのは大切にしたいです。実際今就活中だが徐々にやりたいことが見えてきた気がします。自分の満足いく職場で貢献できるように努めていきたいです。私が生まれる前からある問題、目標、これから社会人になっていく我々世代が社会をうまく巻き込んでいけるかがカギになると思います。一つ一つ責任感を持ち未来像を描き日々改めて注力していきたいです。

SDGs 実践講座最終レポート⑱

全体の講義を通して、SDGs の講義で鮮明に浮かび上がったのは、持続可能な開発の背後にある根本的な問題への理解でした。一つの問題は全ての問題と関連しており、その問題だけを解決しようとするのではなく網羅的に考えて学び、解決策を検討することが重要だと考えました。

例えば、1の「貧困をなくそう」や4の「質の高い教育をみんなに」などの目標は、社会のあらゆる階層で深刻な影響を及ぼしています。特に発展途上国では非常に複雑にあらゆる問題と絡まっていて、一筋縄ではいかないような状態です。授業では、これらの問題が単なる統計や数字だけからわかる表面的な問題や解決方法ではなく、実際の人々の生活にどれほど密接に関わっているかに焦点を当て、私たちがその解決にどのように貢献できるかを考えさせられました。

特に印象的な講義は2つあります。

1つ目は、ジェンダー平等に関する講義です。私は、最後の課題であったグループ発表なども通して重要な洞察を得ました。まず、ジェンダー平等が単なる男女の均等な機会や権利だけでなく、社会や文化において存在する根深い偏見やステレオタイプにも取り組む必要があることを理解しました。

この講義は、私たちが普段何気なく行っている言動や概念が、ジェンダー平等の推進にどれほど影響を与えているかを浮き彫りにしました。例えば、これは SDGs の講義を受ける前に受講した授業で、男として生まれてきたのに心は女性として成長した方がおっしゃっていたことです。「彼女とかいるの？」この何気ない一言の中に固く黒い先入観が入っているということです。日常的に軽く質問してしまうことの中にジェンダーを意識させることが紛れていることに慎重になるべきだと思いました。

また、ジェンダー平等は単なる女性の権利拡大だけでなく、男性も含めた多様なジェンダーに対する理解と認識が不可欠であることを学びました。伝統的なジェンダー役割や期待にとらわれず、個々の才能や選択に対して平等な評価が必要であることに気づくと同時に、これが社会全体にポジティブな影響を与えることも理解しました。

ジェンダー平等の実現には、個人や組織の意識改革が不可欠であり、そのためには教育やコミュニケーションが重要な役割を果たすことを学びました。私自身も教育がこれから重要な役割を果たすと考えます。子供の頃の経験や感情への刺激が成長する上で（多様性を本質的に理解し実践する上で）大切です。

また、職場や日常生活において、平等な機会や報酬を提供し、差別やハラスメントを排除することが求められることも明確になりました。最近ではハラスメント等の問題が非常に敏感に捉えられるようになってきました。このように、これからはジェンダー平等の推進に積極的に参加し、周囲の人々にもその重要性を伝えていくことが課題です。特に、異なるジェンダーの人々が互いに尊重され、共に協力する社会を築くために、持続的な努力と啓発が必要

であると考えています。

2つ目は、地球規模で進行中の気候変動に関する授業回でした。環境問題が持続可能な開発に欠かせない要素であることは理解していましたが、その影響の広がりや、今後の世代への影響について学ぶことで、自らの行動が未来にどのような影響を与えるのかはまだまだ知らないことばかりだったので、学び続ける必要があると思いました。

身に着いたこととしては、個人の日常生活が SDGs にどれだけ関与しているかを実感しました。持続可能なライフスタイルを選択することが、地球環境や社会の改善に寄与する手段であることを理解し、具体的な行動に移すことの必要性を感じました。日本でもレジ袋有料化などの取り組みはされていますが、正直それだけで満足しているところがあると思います。「なぜそうしなければならないのか」「この行為が何に役に立つのか」など常にとは言わないが、問題視することがないと何度も同じ過ちを犯す可能性があります。

他にも、環境問題という大規模なことには国同士などの協力と連携が重要であり、個人だけでなく、地域社会や国際社会と連携して取り組むことが求められることも鮮明になりました。これからは、持続可能な価値観を日常生活に取り入れるだけでなく、積極的に周りの人々にも広めていくことが課題です。これらは、SNS 社会を自在に生きる若い世代が鍵になります。友人や同僚と共にプロジェクトを進め、SDGs の目標を共有し、共感呼び起こすことが、より大きな変革を生み出す一環となるでしょう。これによって、SDGs が抱える課題への対処において、個々の努力が連鎖的な影響を生むことを期待しています。

これらのことを通して、私は知るための努力をしたいです。知識は人間の力強い武器であり、個人の能力や視野を広げ、問題に対処するための道を切り拓くと考えます。新しい情報や経験を積むことは、個人の成長や発展に不可欠であり、これによって人はより深い理解や洞察を得ることができます。継続的な学びと情報の吸収は、個々の人生をより豊かで充実したものにし、世界とのつながりを深める手段となります。このことを念頭に置いて、これからの行動を見つめたいです。

SDGs 実践講座最終レポート⑱

SDGs は 2015 年に国連サミットで採択された国連加盟国、193 カ国が 2030 年までに達成すべき課題を明確化した目標だ。

本 SDGS 講座では、SDGS について 17 の目標ごとに先生方を招き、その多くがレスポンスやグループワークといったコミュニケーションを取る機会があった。今までの自己体験や、知識、そして授業で教わったものを用いて話し合うことで、全学部共通科目でもあるため、自分の知れない考えや常識といったものを知ることができた。特に外国人留学生とのコミュニケーションは全く文化の異なる相手であるため、驚くことは数多くあった。

先生側の授業そのものでは、学内や国内外で行っている活動や、その過程とその活動が行われるきっかけとなる原因を知ることができた。そこでは、プラスチックのゴミ問題や、ジェンダー問題といった今身近に置けている問題もあり、活動こそなされているものの、達成すべき目標には到底届かないといった SDGS の国内での知名度に反して、十分に活動が行われていないことや、そもそも大きく効果がある活動を行う予算や技術がない分野といったものもあった。今の活動で足りないからこそ次の世代であるわたしたちが、どのような技術や考えを生み出して行動するべきかを今の事象を用いて訴えかけて促すものであった。

その中には、例えば高度経済成長期の日本で起きていた問題が、今の外国でも全く同じ問題として起きていたりする事例も多くあり、素手ぬ解決する技術はあるものの、国益や政治の状況といった背景に注目しつつ、どのように行動するべきなのかと、今後の学びや将来の活動へ活かせる問題提起が多くあった。

身についたこととしては、1つ目に「社会学を教わるだけではなく、どのように社会の問題に用いるべきなのか」という個人的な問題に際して、この講座での学びがいくつかのアプローチとなる事例を提供し、さらなる考えの深みへと導いてくれたことだ。社会学で言われる、経済の帝国主義や、経済開発のアプローチ、また人間開発論や社会権。他にも共生社会学で上がるジェンダーや在日外国人といった学んでも詳しく知らなかったり、使うことがあまりない内容であっても、1年生と浅い学びにも関わらず、結びつくものが多くあった。SDGS 全ての目標が関連性や共通点を持つ中で、社会学という当たり前を疑う学問はとても相性が良く、今回の広く浅いと言える学びの提供からさらなる深みへの学びとして素晴らしいものだった。

2つ目は、積極性の重要性を改めて認知できたことである。総合選抜での入学や、夏休暇中のインターン参加など、すでに積極性はある程度あると自負しているが、言語の異なる相手に対しては、自分の外国語力の不足もあり、躊躇してしまうことが多くあった。現在でも外国語力の不足は否めないが、講座の学びを通して、社会を知るにはやはり言語の壁を超えなければ、真の答えにはたどり着けないという結論に至った。今は言語の不足を少しでも無くすため、努力を重ねつつ、不足している分は他の人の力を借りるといった形で社会にも学びにも貢献していきたい。

本講座で最も心に残った授業回は、第6回のフードロスについてだ。現在スーパーでアルバイトをしている自分にとってフードロスは目に見える大きな問題であると感じている。自分自身がどれだけ賞味期限の近い商品を買っていても、莫大なフードロスが発生していることを毎度行われる廃棄を通して目にしている。外国では食糧難に加えて、エネルギー別での不足が起きている中で、日本国内での大量生産大量消費や、外国からの輸入に頼りつつもやはり廃棄してしまうという資本主義ならではの行動を当たり前に行っていることは、経済衰退で日々話題になっている中では違和感を感じるなと感じた。どれほど品種改良が行われていても結局は需要と供給には抗えないのだと悲しく感じる中で、なにかできることはないのか、文京区での活動も調べつつ今後考えていきたい。

これから行えることとして、今回の学びといったものを深めるにあたり、学ぶだけではなく参加し発信していくべきだと考える。文京区や東京都といった情報の発信と収集に恵まれた環境を精一杯用いていこうと考えている。社会調査といった社会学の学びに加え、転勤族であったゆえに様々な考えなどをもてたことなどの自分の背景を使うことで、どのような些細なことでも無駄にせず、学びとさらなる行動につなげていきたい。

また、SDGS 講座終了後も、SDGS アンバサダーとして様々な事ができるはずだ。自分自身が所属しているダイバーシティチームに加え、ウォーターサーバープロジェクトにも所属し、今後は2年生として運営にもより携わることから、コミュニケーションの機械を増やして、社会問題の解決に加え身近な問題にも活かし、自分自身の人生も、他の人の人生も豊かになるように貢献して行きたい。

SDGs 実践講座最終レポート②⑩

1.) 問題提起

私は、「SDGs は胡散臭い」、「SDGs ウォッシュ」と批判している人こそ、SDGs について体系的に触れる機会を作るべきだと考える。なぜ、このような考えに至ったのか、SDGs 実践講義に参加したきっかけ（「2. 総論」にて）から、講義で学んだことを、レポートの設問に沿って、講師の方がフロアの学生に向けて発した“問い”に着目しながら、整理していく（「3. 各論」にて）。

2.) 総論

SDGs 実践講義に参加したきっかけは、後期履修科目を探している時、6号館の掲示板にて実践講義のチラシを見つけたことだった。その時、SDGs に関して何も知らなかった。というのも、ゴールが何個あるのか、誰が設定したのか、MDGs に関して言葉すら知らず、知ろうとすら、してなかった。加えて、なんとなく嫌っていて、どちらかというとな否定的な意見を持っていた。

しかし、最後の機会だと思って体系的に学んでみようかな、講座に参加する人は、SDGs に積極的に関わっている人なのか（当時は、どんな意識高い人がいるのだろうという好奇心だったと記憶している。）と考えながら、単位のために参加した。（講座の申込みの際には、興味があり、学びたい目標があると書いたが、そのようなものは全くなかったことを謝罪したい。）大学の授業だから、間違った知識や価値観の押し付けをしているような人はいないだろうという安心があったから、参加できたと思う。参加してみて、それぞれ個性の強い、自分の考えを持った学生とディスカッションしながら、受講できたことは、自分にとって良い機会になった。

3.) 各論

1) 全体の概要

学修到達目標に沿って、講座全体を振り返る。まず、1.SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力については、SDGs の理念を理解する上で、具体的な目標はもちろん、“前文”にて書かれていることが重要だと第2回の講義で学んだ。

私は、SDGs の理念を「自分ごと」として理解するために、前文を読み、より実践講義と密接に関連する一部分を翻訳・引用する。『我々は、世界を持続的かつ強靱(レジリエント)な道筋に移行させるために緊急に必要な、大胆かつ変革的な手段をとることに決意している』と『目標及びターゲットは、統合され不可分のもの』この2点は、講義で学んだことと密接に関連していると考え。一点目は、SDGs を設定した時から、理想像を規定したようなものであることは、共通理解としてあること、2点は、講義内でも説明されていたように、各目標は不可分のものであること。この2点は、講義の内容と密接に関連し、需要であると考

える。

次に、2.「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力については、講義の内容を意識した上で、具体的な行動に移すことは、できていないため、未達成としたい。

そして、3. 課題・問題を発見する力と 4. 他者と関わりチームとして成果をあげる力については、最終報告にて表現できたと考える。

2) 心に残った授業回

第 12 回 Security の再考：市川顕先生

心に残った授業回は、第 12 回である。まず SDGs 誕生に関わったことのある方の話には、説得力と愛が感じられた。

特に心に残った部分は、「ロシアがヨーロッパに対して行った天然ガスの武器化をはじめとした、様々なモノが武器化されてしまう現状」と「次の世代を設計してほしい」という市川さんの言葉である。

前者に関しては、国同士の利害関係のように大きな問題となると、自分ごととして理解することが困難になる。一方で、市川さんは、学生にも理解できるよう、日本では、中露の隣国でありながら、エネルギーに関する安全保障を問題として認識している人が少ないことを指摘しつつ、様々なモノが武器化されることで、意外と我々の生活は危ういことを説明してくださったことが印象に残っている。

後者に関して、SDGs の前文にて、「大胆かつ変革的な手段をとることに決意している」とあるが、僕ら若い世代が SDGs を本気で担っていくことができれば、大胆かつ変革的な手段であっても実行することができ、より良い世界になると信じている作成者の思いが伝わってきた。

3) 身についたこと

講義を通じて、物事を多面的に捉える力がついたと考える。多面的に考えるとは、ある事象がプラスに働く場面がある一方で、マイナスとなる場面もあるということ。つまり、ある人にとっては、最適解と考えることでも、ある人にとっては、受け入れがたい意見になる可能性を秘めていることを自覚しなければならない。最終講義にて、LGBT-Q について、「知ることと正しい理解」が解決策だと発表したグループがあったが、私は、知り、正しい理解をした後は、無関心に徹することが求められるのではないかと考える。このように、あえて批判的に考えたり、全く反対の意見を考慮したりすることが多面的に考えるということだと実感した。

講義を通じて、身についた SDGs に関する知識や考え方は、積極的に実践する機会に参加していないため、本当の意味で身についたと言えるのか、わからない。ただ、講義を一緒に受けた法学部かつ同じゼミに所属する安田さんと、講義内容について、毎講義後に、批判も

含めディスカッションをしていたため、自分の頭の中に留めるだけでなく、学んだ知識や考え方を発信する訓練はできていたのではないかと感じる。

4. > これからどう活かすか

講義で学んだことを意識し、一つ一つの行動や習慣に落とし込み、具体的な行動に移したり、新たな取り組みに参加したりはできていないため、少しだけ、どのような仕事をしたいか、述べる。

私は、公認会計士を目指しており、主な業務は上場企業の監査を担当する。監査というと、財務諸表のような書類作成などをイメージする方が多いが、企業に求められている情報の開示量が増えている現状において、ESG 投資先として適しているか、パフォーマンスとして SDGs に関する取り組みをしているようにみせかけている企業かどうかをチェックする役目を果たしているなど、多岐に渡ると感じている。

第6回授業にて、複雑な問題を解決するためには、専門家だけでは限界があり、文系・理系の枠をなくし、教育を受けた者の責任を果たすことが求められていると学んだ。このように公認会計士という専門家として、キャリアを積み上げて過程で、SDGs に触れる機会は少なからずあると感じる。そんな時、講義で学んだことは生きると感じている。

4. 結びにかえて

序論にて「SDGs は胡散臭い」、「SDGs ウォッシュ」と批判している人こそ、SDGs について体系的に触れる機会を作るべきだと述べた。私は、どちらかというとも SDGs という響きだけで、なんとなく嫌っていたが、この講義を通じて、当時の姿勢を反省している。

一部分しか知らないにも関わらず、そこだけを切り取って、嫌うことや世界にとって良いことだからと無条件に受け入れることをやめ、物事を多面的に考え、受け入れるか、距離を取るか、それは各人の選択に委ねるべきだと考える。つまり、どんな事象であっても、体系的に触れてみた後、賛成や批判すべきだと考える。

SDGs に興味のない人やむしろなんとなく避けている人こそ、この講義に参加する価値があると思う。